



公立大学法人 福井県立大学

Fukui Prefectural University

ファカルティ・ディベロップメント 報告書 2015

2016年3月

教育学習支援チーム

はじめに

福井県立大学では、経済学部、生物資源学部、海洋生物資源学部、看護福祉学部、学術教養センター、キャリアセンターと多様な部局が存在して、それぞれが学生の教育に取り組んでいます。昨年度から、FD活動とその中心をなす授業評価に関してこれまでとは異なる以下のような体制で臨むようになりました。

授業評価は、基本的にすべての授業を対象に行い、その結果は学内にはすべて公開され、部局内では授業改善のために部局長と学習支援チーム委員および担当教員が話し合う場も設けることができるようになっていました。また、授業公開や授業改善のための情報交換も、それぞれの部局の特色に基づいて取り組んでいただいております。

これらの取り組みが2年目を迎えて、すべての部局の授業評価において評価点の向上や高いレベルでの維持が示されているようです。しかし、学生にとっては授業評価が学期の最後の授業時間に集中して実施されるために、評価がおざなりになってしまう学生もいると思います。また、自由記述欄のコメントに対する教員のレスポンスを学内LANで閲覧できるようになっているにもかかわらず、それを閲覧していない学生がほぼすべてであるという現実もあります。

各部局におけるFD活動においては、授業改善のための情報交換は随分と本質的な問題や、部局を超えて共通する大学教育における課題なども指摘されているように考えます。今後、部局を超えての情報の共有化や課題解決のための協働が進められればと思います。

平成28年度には文部科学省のCOC+事業において、福井県下5大学が共同した学生教育への取り組みが始まります。学生が受講する科目の一部が当事業の中で行われるとはいえ、これまで乏しかった県内の大学間における教育交流が一気に進むことになりました。このことは教職員や学生の負担を増やすことは否めませんが、教員にとっては学生をより主体的に学ばせるための貴重な情報を得たり、学生にとっても他大学の学生との交流ができる貴重な機会となるはずです。

FD活動は、教員と学生の双方向の意見交換によって授業改善を進めたり、教員自身の自発的な自己研さんによって大学教育を改善することが目的ですが、取り組み方によってはあつという間に形骸化することも否定できません。教育の改善に停滞は許されませんし、停滞は後退につながります。従いまして、FD活動が本来の目的を達成できるように本報告書を活用していただき、さらに一歩前に向かって前進していただけたらと思います。また、最後になりましたが本年度1年間のFD活動への積極的な献身と、本報告書を取りまとめるにあたってチームリーダーの北村知之先生はじめ各部局のチーム員および事務局の皆様のご尽力に対し深謝いたします。

2016年3月

教育学習支援チーム代表 青海 忠久

1. 活動概要-----	1
1. 1 委員の構成-----	1
1. 2 事業の実施状況-----	2
1. 2. 1 授業評価-----	2
1. 2. 2 授業公開-----	10
1. 2. 3 F D 研修-----	10
1. 2. 4 実施要項-----	11
2. 各部局のF D 活動	
2. 1 経済学部	
2. 1. 1 授業評価-----	14
2. 1. 2 授業公開-----	14
2. 1. 3 部局内F D 研修-----	20
2. 1. 4 授業改善についての課題と展望-----	21
2. 2 生物資源学部	
2. 2. 1 授業評価-----	22
2. 2. 2 授業公開-----	22
2. 2. 3 部局内F D 研修-----	22
2. 2. 4 授業改善についての課題と展望-----	30
2. 3 海洋生物資源学部	
2. 3. 1 授業評価-----	31
2. 3. 2 授業公開-----	31
2. 3. 3 部局内F D 研修-----	34
2. 3. 4 授業改善についての課題と展望-----	35
2. 4 看護福祉学部	
2. 4. 1 授業評価-----	36
2. 4. 2 授業公開-----	37
2. 4. 3 授業改善への取り組み-----	37
2. 4. 4 部局内F D 研修-----	39
2. 4. 5 授業改善についての課題と展望-----	48
2. 5 学術教養センター	
2. 5. 1 授業評価-----	50
2. 5. 2 授業公開-----	50
2. 5. 3 部局内F D 研修-----	52
2. 5. 4 授業改善についての課題と展望-----	53
3. 点検と課題	
3. 1 授業評価-----	61
3. 2 授業公開-----	62
3. 3 研修-----	63
おわりに-----	63

1. 活動概要

1.1 委員の構成

チームの規定(規定第 12 号)により教育担当理事をチーム長とし、メンバーを理事が選考する。
2015 年度のメンバーは、以下の 12 名の教員と 5 名の職員である。

2015 年度チーム委員名簿

氏 名	所 属	職	役 割
青 海 忠 久	理事 (教育担当)	副学長〈教育〉	チーム長
北 村 知 之	学術教養センター	教 授	チームリーダー
尹 淑 鉦	経済学部	教 授	委 員
杉 山 泰 之	経済学部	准 教 授	委 員
平 修	生物資源学部	准 教 授	委 員
林 潤	生物資源学部	講 師	委 員
近 藤 竜 二	海洋生物資源学部	教 授	委 員
松 川 雅 仁	海洋生物資源学部	准 教 授	委 員
平 井 一 芳	看護福祉学部	准 教 授	委 員
吉 川 公 章	看護福祉学部	准 教 授	委 員
山 川 修	学術教養センター	教 授	委 員
津 村 文 彦	学術教養センター	准 教 授	委 員
坂 口 卓 夫	教育・学生支援部	教育・学生支援部長	事 務 局
山 崎 英 雄	教育推進課	課 長 代 理	事 務 局
山 口 達 朗	財務管理課	主 事	事 務 局
芝 原 靖 之	企画サービス室 (小浜 C)	主 任	事務局 (小浜 C)
福 岡 美 和	教育推進課	企 画 主 査	事務局 (福井 C)

1.2 事業の実施状況

1.2.1 授業評価

実施要項、実施概要、質問および回答用紙、全体集計結果を次頁より順に掲載する。実施概要を 2013 年度のそれと比較すると、前期の学部の参加科目が 305 科目から 321 科目に増加 (内訳は経済学部 14 科目増、生物資源学部 3 科目増、海洋資源学部 6 科目減、看護福祉学部 6 科目増、学術教養センター 1 科目減、キャリア教育科目増減なし) し、後期は 296 科目から 327 科目に増加 (内訳は経済学部 13 科目増、生物資源学部 1 科目減、海洋資源学部 1 科目増、看護福祉学部 14 科目増、学術教養センター 3 科目増、キャリア教育科目増減なし) した。

平成27年度 学生による授業評価の実施結果

【前期】

〔実施期間〕

平成27年7月16日(木)～7月29日(水)

〔調査票配布・回収状況〕

＜学部＞	回収数	配布数
経済学部	2,792 枚	4,823 枚
生物資源学部	849 枚	1,048 枚
海洋生物資源学部	645 枚	888 枚
看護福祉学部	1,555 枚	1,949 枚
学術教養センター	4,845 枚	7,330 枚
キャリアセンター	7 枚	8 枚
計	10,693 枚	16,046 枚

＜大学院＞	回収数	配布数
経済・経営学研究科	50 枚	50 枚
生物資源学研究科	53 枚	90 枚
看護福祉学研究科	25 枚	36 枚
計	128 枚	176 枚

〔参加教員〕

＜学部＞		
経済学部	29 人	96.7%
生物資源学部	14 人	87.5%
海洋生物資源学部	13 人	92.9%
看護福祉学部	27 人	90.0%
学術教養センター	26 人	96.3%
キャリアセンター他	6 人	100.0%
非常勤講師	48 人	92.3%
計	163 人	93.1%

＜大学院＞		
経済・経営学研究科	6 人	100.0%
生物資源学研究科	6 人	100.0%
看護福祉学研究科	7 人	46.7%
キャリアセンター他	1 人	100.0%
非常勤講師	4 人	100.0%
計	24 人	75.0%

〔参加科目〕

＜学部＞		
経済学部	63 科目	84.0%
生物資源学部	25 科目	86.2%
海洋生物資源学部	18 科目	78.3%
看護福祉学部	50 科目	67.6%
学術教養センター	164 科目	89.1%
キャリア教育科目	1 科目	100.0%
計	321 科目	83.2%

＜大学院＞		
経済・経営学研究科	7 科目	87.5%
生物資源学研究科	6 科目	75.0%
看護福祉学研究科	8 科目	50.0%
計	21 科目	65.6%

【後期】

〔実施期間〕

平成28年1月15日(金)～1月28日(木)

〔調査票配布・回収状況〕

＜学部＞	回収数	配布数
経済学部	2,420 枚	4,417 枚
生物資源学部	459 枚	706 枚
海洋生物資源学部	619 枚	880 枚
看護福祉学部	1,485 枚	2,000 枚
学術教養センター	3,709 枚	6,141 枚
キャリアセンター	1 枚	3 枚
計	8,693 枚	14,147 枚

＜大学院＞	回収数	配布数
経済・経営学研究科	26 枚	43 枚
生物資源学研究科	26 枚	50 枚
看護福祉学研究科	9 枚	29 枚
計	61 枚	122 枚

〔参加教員〕

＜学部＞		
経済学部	34 人	100.0%
生物資源学部	14 人	73.7%
海洋生物資源学部	14 人	93.3%
看護福祉学部	20 人	69.0%
学術教養センター	23 人	82.1%
キャリアセンター他	7 人	77.8%
非常勤講師	37 人	92.5%
計	149 人	85.6%

＜大学院＞		
経済・経営学研究科	6 人	66.7%
生物資源学研究科	3 人	60.0%
看護福祉学研究科	4 人	40.0%
キャリアセンター他	1 人	100.0%
非常勤講師	0 人	0.0%
計	14 人	53.8%

〔参加科目〕

＜学部＞		
経済学部	100 科目	85.5%
生物資源学部	16 科目	80.0%
海洋生物資源学部	21 科目	77.8%
看護福祉学部	45 科目	83.3%
学術教養センター	144 科目	87.3%
キャリア教育科目	1 科目	100.0%
計	327 科目	85.2%

＜大学院＞		
経済・経営学研究科	7 科目	63.6%
生物資源学研究科	3 科目	60.0%
看護福祉学研究科	4 科目	40.0%
計	14 科目	53.8%

全体集計結果の見方

次頁より授業評価の集計結果を学部（前期・後期）、大学院（前期・後期）の順に掲載する。以下に、集計結果の見方を記す。

全集計数	回答された全てのアンケートから学部・学科・入学年度が不明のデータを除いたもの
Q1 から Q5	アンケートの Q1 から Q5 に対応 設問のキーワードを記すが、詳細は 18 頁を参照
数値上段	平均値（質問は、4 件法）
数値下段	母標準偏差。数値が大きい場合、平均値周りに正規分布状にばらつきが大きい時もあるが、良い評価と悪い評価が 2 分されている場合もあるので要注意。
集計方法	設問は、回答選択肢「1, 2, 3, 4」をそれぞれ「1 点, 2 点, 3 点, 4 点」と得点化、設問に対して無回答の場合は得点化せず、かつ有効回答数としては計上していない。この得点化規則に則り、設問別、集計グループ別に合計得点を求めて、有効回答数で割った平均値を上段に、母標準偏差を下段に示す。無回答の場合の人数は母集団に含めず。「―」の欄は有効回答が無かったことを示す。

〔集計グループ〕

全体	全ての集計対象者
学部学科別	当該学部または学科の学生の評価結果を集計
入学年次別	学部学科の枠を越え、学生の入学年次（西暦年の下 2 桁）別に集計
部局別	当該学部に所属する教員が提供する科目に対する評価結果を集計
規模別	授業が行われた教室の大小別に集計

全体集計結果（学部・前期）

集計グループ	(集計数)	Q1意欲の受講	Q2授業方法	Q3内容理解	Q4関心	Q5総合評価
全体	(10332)	3.25 0.70	3.34 0.70	3.15 0.73	3.20 0.77	3.37 0.68
学部学科別 (10332)						
経済学部	(5328)	3.24 0.72	3.33 0.73	3.15 0.75	3.19 0.78	3.35 0.70
経済学科	(2689)	3.21 0.70	3.31 0.74	3.13 0.74	3.18 0.77	3.33 0.69
経営学科	(2639)	3.26 0.73	3.35 0.73	3.17 0.77	3.20 0.79	3.37 0.71
生物資源学部	(1303)	3.22 0.66	3.24 0.70	3.09 0.70	3.13 0.77	3.27 0.69
生物資源学科	(1303)	3.22 0.66	3.24 0.70	3.09 0.70	3.13 0.77	3.27 0.69
海洋生物資源学部	(1212)	3.13 0.69	3.30 0.67	3.09 0.69	3.11 0.76	3.32 0.65
海洋生物資源学科	(1212)	3.13 0.69	3.30 0.67	3.09 0.69	3.11 0.76	3.32 0.65
看護福祉学部	(2487)	3.36 0.66	3.45 0.65	3.23 0.69	3.31 0.74	3.47 0.62
看護学科	(1656)	3.39 0.64	3.46 0.65	3.28 0.66	3.37 0.70	3.49 0.61
社会福祉学科	(831)	3.30 0.67	3.43 0.66	3.12 0.73	3.20 0.80	3.42 0.64
科目等履修生・聴講生	(2)	4.00 0.00	4.00 0.00	3.50 0.50	4.00 0.00	4.00 0.00
入学年次別 (10332)						
08生	(0)	- -	- -	- -	- -	- -
09生	(9)	3.67 0.67	3.78 0.42	3.67 0.47	3.78 0.42	3.78 0.42
10生	(13)	3.31 0.61	3.92 0.27	3.69 0.46	3.85 0.36	3.92 0.27
11生	(42)	3.52 0.70	3.55 0.76	3.55 0.62	3.64 0.53	3.55 0.62
12生	(377)	3.56 0.60	3.56 0.70	3.48 0.64	3.60 0.60	3.61 0.60
13生	(2173)	3.17 0.70	3.25 0.73	3.08 0.73	3.12 0.78	3.26 0.70
14生	(2898)	3.22 0.66	3.30 0.71	3.13 0.71	3.20 0.75	3.34 0.68
15生	(4820)	3.28 0.71	3.39 0.68	3.17 0.73	3.21 0.78	3.41 0.66
部局別 (10332)						
経済学部	(2685)	3.20 0.72	3.25 0.78	3.05 0.79	3.13 0.80	3.26 0.75
生物資源学部	(814)	3.15 0.65	3.17 0.70	3.01 0.70	3.08 0.77	3.20 0.68
海洋生物資源学部	(625)	3.11 0.65	3.29 0.64	3.09 0.66	3.09 0.72	3.30 0.61
看護福祉学部	(1498)	3.38 0.64	3.45 0.66	3.24 0.66	3.37 0.72	3.47 0.63
学術教養センター	(4710)	3.27 0.71	3.40 0.67	3.22 0.71	3.23 0.77	3.43 0.64
規模別 (10332)						
100人以上	(5301)	3.19 0.71	3.27 0.74	3.07 0.76	3.14 0.79	3.29 0.71
100人未満	(5031)	3.32 0.67	3.42 0.66	3.24 0.67	3.27 0.74	3.45 0.64

全体集計結果（学部・後期）

集計グループ	（ 集計数 ）	Q1意欲的受講	Q2授業方法	Q3内容理解	Q4関心	Q5総合評価
全体	（ 8400 ）	3.25 0.70	3.37 0.68	3.17 0.71	3.22 0.75	3.38 0.66
学部学科別（ 8400 ）						
経済学部	（ 4370 ）	3.24 0.72	3.35 0.70	3.15 0.73	3.22 0.77	3.36 0.68
経済学科	（ 2227 ）	3.19 0.71	3.31 0.69	3.12 0.71	3.18 0.77	3.32 0.67
経営学科	（ 2143 ）	3.29 0.72	3.38 0.71	3.19 0.74	3.26 0.76	3.39 0.69
生物資源学部	（ 883 ）	3.21 0.68	3.31 0.67	3.14 0.68	3.18 0.72	3.33 0.65
生物資源学科	（ 883 ）	3.21 0.68	3.31 0.67	3.14 0.68	3.18 0.72	3.33 0.65
海洋生物資源学部	（ 1061 ）	3.10 0.69	3.27 0.67	3.04 0.70	3.09 0.77	3.30 0.65
海洋生物資源学科	（ 1061 ）	3.10 0.69	3.27 0.67	3.04 0.70	3.09 0.77	3.30 0.65
看護福祉学部	（ 2072 ）	3.35 0.68	3.48 0.63	3.26 0.68	3.31 0.72	3.49 0.61
看護学科	（ 1239 ）	3.40 0.64	3.49 0.61	3.33 0.64	3.37 0.67	3.52 0.57
社会福祉学科	（ 833 ）	3.29 0.72	3.46 0.67	3.16 0.72	3.22 0.79	3.44 0.68
科目等履修生・聴講生	（ 14 ）	3.43 0.82	3.50 0.50	3.57 0.49	3.64 0.48	3.57 0.49
入学年次別（ 8400 ）						
08生	（ 0 ）	- -	- -	- -	- -	- -
09生	（ 1 ）	4.00 0.00	4.00 0.00	3.00 0.00	3.00 0.00	4.00 0.00
10生	（ 20 ）	3.60 0.58	3.85 0.36	3.95 0.22	3.95 0.22	3.95 0.22
11生	（ 29 ）	3.38 0.76	3.55 0.56	3.24 0.82	3.41 0.62	3.59 0.49
12生	（ 481 ）	3.51 0.69	3.66 0.57	3.49 0.64	3.57 0.65	3.69 0.55
13生	（ 1562 ）	3.23 0.71	3.35 0.69	3.19 0.70	3.22 0.75	3.38 0.67
14生	（ 2589 ）	3.21 0.66	3.29 0.68	3.10 0.69	3.17 0.74	3.32 0.65
15生	（ 3718 ）	3.24 0.73	3.38 0.68	3.15 0.73	3.20 0.77	3.38 0.66
部局別（ 8400 ）						
経済学部	（ 2324 ）	3.22 0.72	3.31 0.72	3.11 0.75	3.19 0.78	3.32 0.69
生物資源学部	（ 449 ）	3.16 0.61	3.25 0.65	3.08 0.69	3.18 0.72	3.30 0.65
海洋生物資源学部	（ 593 ）	3.02 0.69	3.23 0.69	2.95 0.69	2.99 0.79	3.24 0.67
看護福祉学部	（ 1418 ）	3.37 0.66	3.48 0.63	3.29 0.64	3.36 0.68	3.51 0.59
学術教養センター	（ 3616 ）	3.26 0.71	3.39 0.67	3.20 0.71	3.23 0.75	3.40 0.66
規模別（ 8400 ）						
100人以上	（ 4336 ）	3.17 0.72	3.29 0.70	3.08 0.73	3.14 0.78	3.30 0.68
100人未満	（ 4064 ）	3.33 0.68	3.45 0.65	3.26 0.68	3.31 0.71	3.47 0.63

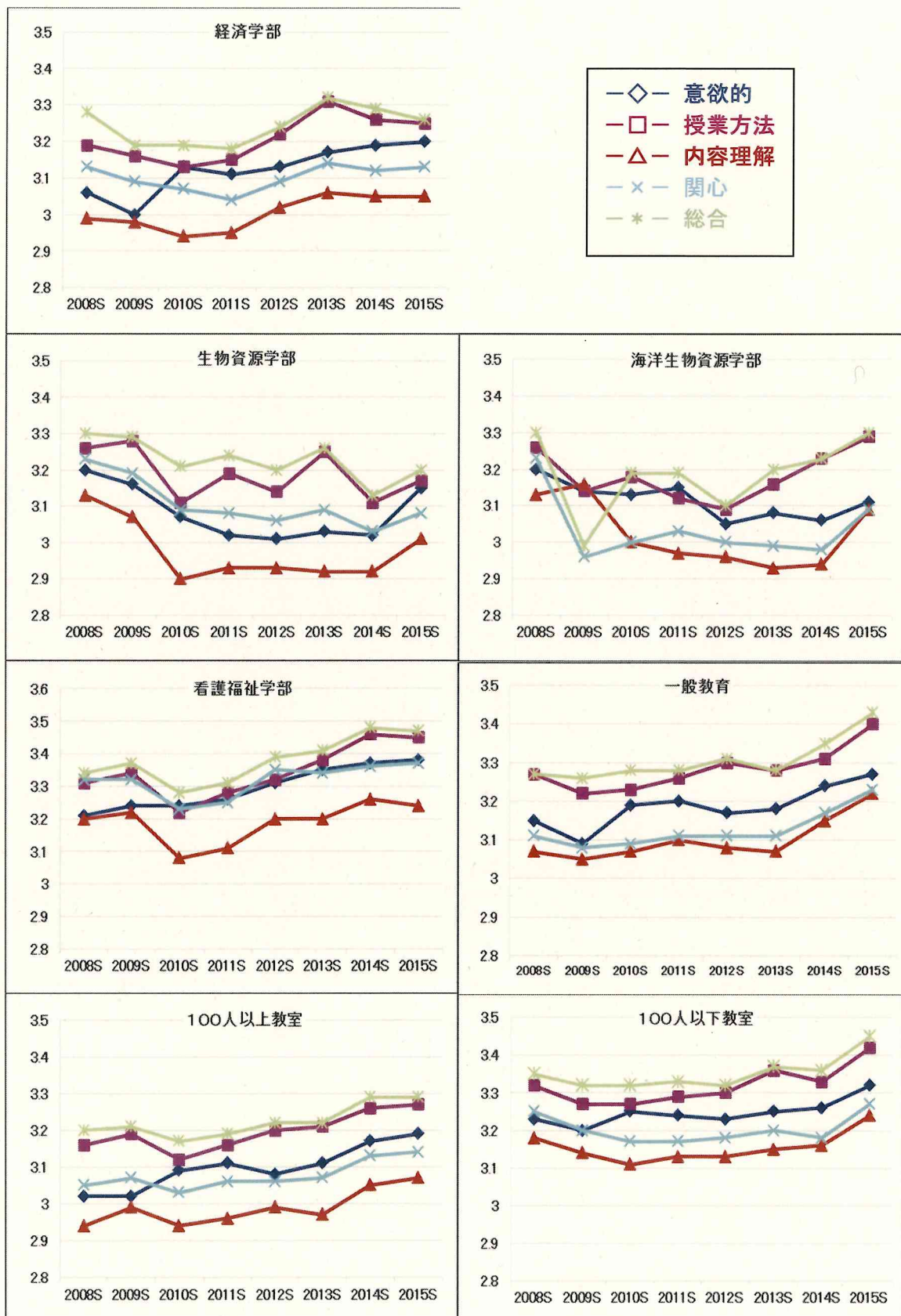
全体集計結果（大学院・前期）

集計グループ	(集計数)	Q1意欲の受講	Q2授業方法	Q3内容理解	Q4関心	Q5総合評価
全体	(117)	3.56 0.59	3.74 0.50	3.50 0.53	3.68 0.50	3.75 0.45
研究科専攻別 (117)						
経済・経営学研究科 (47)	地域・国際経済政策専攻 (28)	3.60	3.83	3.68	3.81	3.79
		0.70	0.48	0.51	0.44	0.46
	経営学専攻 (19)	3.79	3.82	3.68	3.89	3.82
		0.41	0.47	0.47	0.31	0.38
	生物資源学研究科 (49)	3.32	3.84	3.68	3.68	3.74
		0.92	0.49	0.57	0.57	0.55
	生物資源学専攻 (35)	3.45	3.57	3.29	3.59	3.73
		0.50	0.53	0.49	0.53	0.44
	海洋生物資源学専攻 (14)	3.46	3.63	3.29	3.71	3.83
		0.50	0.48	0.45	0.45	0.38
看護福祉学研究科 (20)	看護学専攻 (9)	3.43	3.43	3.29	3.29	3.50
		0.49	0.62	0.59	0.59	0.50
	社会福祉学専攻 (11)	3.75	3.90	3.60	3.60	3.70
		0.43	0.30	0.49	0.49	0.46
	科目等履修生・聴講生 (1)	3.67	3.89	3.67	3.67	3.56
		0.47	0.31	0.47	0.47	0.50
入学年次別 (117)						
08生 (0)	—	—	—	—	—	
	—	—	—	—	—	
09生 (0)	—	—	—	—	—	
	—	—	—	—	—	
10生 (0)	—	—	—	—	—	
	—	—	—	—	—	
11生 (0)	—	—	—	—	—	
	—	—	—	—	—	
12生 (0)	—	—	—	—	—	
	—	—	—	—	—	
13生 (5)	3.80	4.00	4.00	4.00	3.80	
	0.40	0.00	0.00	0.00	0.40	
14生 (17)	3.24	3.65	3.41	3.47	3.59	
	0.94	0.59	0.69	0.61	0.60	
15生 (95)	3.61	3.74	3.49	3.71	3.78	
	0.49	0.49	0.50	0.48	0.41	
部局別 (117)						
経済・経営学研究科 (47)	3.60	3.83	3.68	3.81	3.79	
	0.70	0.48	0.51	0.44	0.46	
生物資源学研究科 (49)	3.45	3.57	3.29	3.59	3.73	
	0.50	0.53	0.49	0.53	0.44	
看護福祉学研究科 (21)	3.76	3.90	3.62	3.62	3.71	
	0.43	0.29	0.49	0.49	0.45	

全体集計結果（大学院・後期）

集計グループ	(集計数)	Q1意欲的受講	Q2授業方法	Q3内容理解	Q4関心	Q5総合評価
全体	(56)	3.43 0.68	3.71 0.49	3.45 0.56	3.64 0.52	3.71 0.52
研究科専攻別	(56)					
経済・経営学研究科	(23)	3.74 0.44	3.83 0.38	3.65 0.48	3.91 0.28	3.91 0.28
地域・国際経済政策専攻	(16)	3.81 0.39	3.75 0.43	3.63 0.48	3.88 0.33	3.88 0.33
経営学専攻	(7)	3.57 0.49	4.00 0.00	3.71 0.45	4.00 0.00	4.00 0.00
生物資源学研究科	(25)	3.16 0.61	3.52 0.57	3.20 0.57	3.40 0.57	3.44 0.64
生物資源学専攻	(18)	3.06 0.52	3.61 0.49	3.06 0.52	3.33 0.58	3.50 0.60
海洋生物資源学専攻	(7)	3.43 0.73	3.29 0.70	3.57 0.49	3.57 0.49	3.29 0.70
看護福祉学研究科	(8)	3.38 0.99	4.00 0.00	3.63 0.48	3.63 0.48	4.00 0.00
看護学専攻	(2)	4.00 0.00	4.00 0.00	4.00 0.00	4.00 0.00	4.00 0.00
社会福祉学専攻	(6)	3.17 1.07	4.00 0.00	3.50 0.50	3.50 0.50	4.00 0.00
科目等履修生・聴講生	(0)	— —	— —	— —	— —	— —
入学年次別	(56)					
08生	(0)	— —	— —	— —	— —	— —
09生	(0)	— —	— —	— —	— —	— —
10生	(0)	— —	— —	— —	— —	— —
11生	(1)	3.00 0.00	4.00 0.00	3.00 0.00	3.00 0.00	3.00 0.00
12生	(0)	— —	— —	— —	— —	— —
13生	(0)	— —	— —	— —	— —	— —
14生	(8)	3.75 0.43	3.88 0.33	3.63 0.48	3.50 0.50	3.75 0.43
15生	(47)	3.38 0.70	3.68 0.51	3.43 0.57	3.68 0.51	3.72 0.53
部局別	(56)					
経済・経営学研究科	(23)	3.74 0.44	3.83 0.38	3.65 0.48	3.91 0.28	3.91 0.28
生物資源学研究科	(25)	3.16 0.61	3.52 0.57	3.20 0.57	3.40 0.57	3.44 0.64
看護福祉学研究科	(8)	3.38 0.99	4.00 0.00	3.63 0.48	3.63 0.48	4.00 0.00

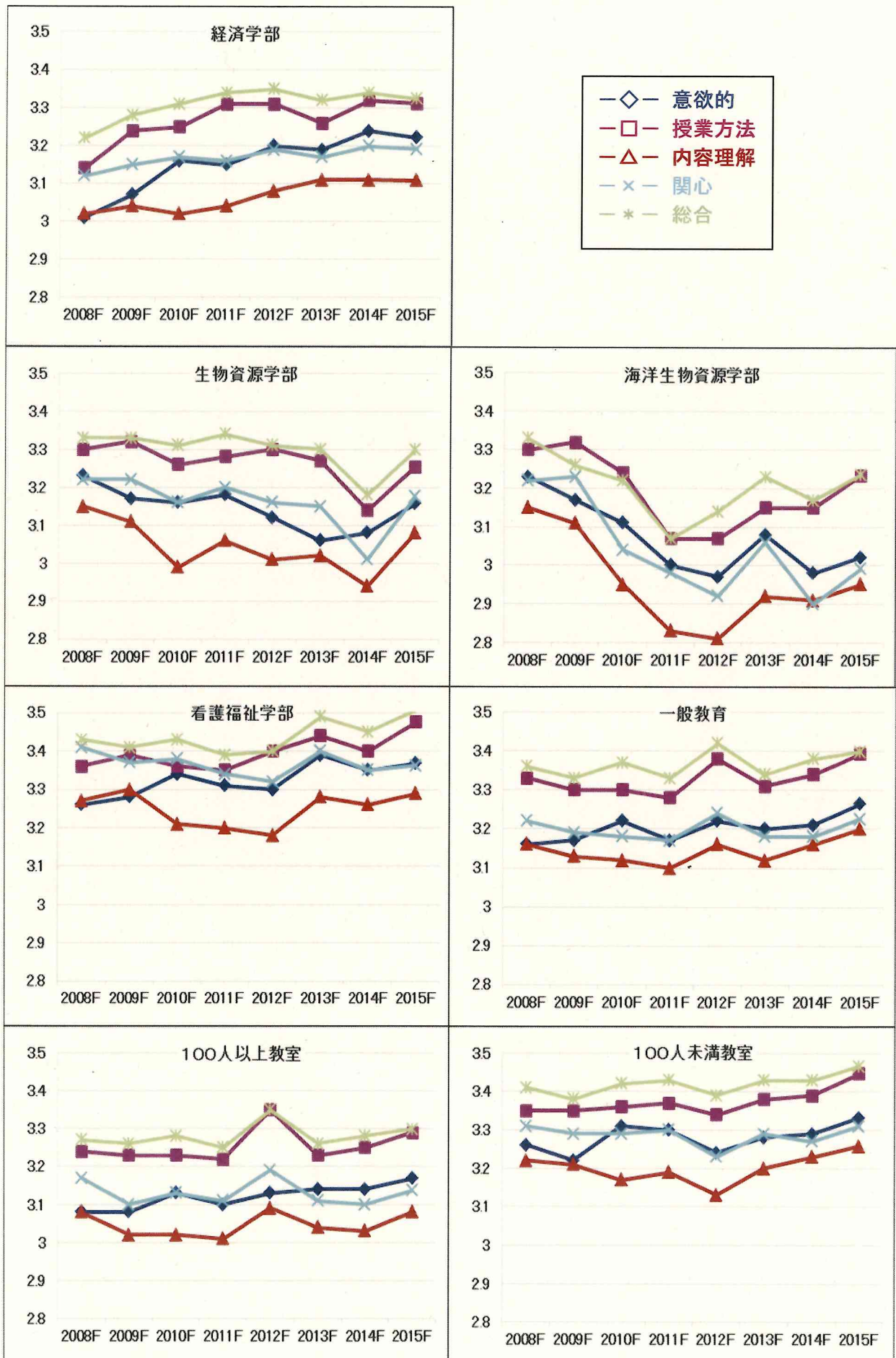
図1 重要項目の経年特性（前期）



(注)

- ・「意欲的」は学生の授業に対する意欲、「授業方法」は授業の進行方法、「内容理解」は学生の満足度や学力、「関心(が高まった)」は、教員と学生双方の努力、「総合(評価)」は授業の質、に各々関係していると考えている。
- ・軸の数値のSは春学期（前期）を、次項のFは秋学期（後期）を意味する。

図2 重要項目の経年特性（後期）



1.2.2 授業公開

詳細は2章「各部局のFD活動」にて報告する。

1.2.3 FD研修

全体研修のみ示す。それぞれの詳細および各部局で行った研修は、2章「各部局のFD活動」にて報告する。

学内研修

参加イベント・日程・会場	参加者数
福井大学における教育の質保証に向けた取組み ―福井大学におけるGPAやCAP制など― 平成27年10月5日（月） 福井県立大学	29名

学外研修

参加イベント・日程・会場	参 加 者
・日本アクションラーニング協会年次カンファレンス 2015 ・立教リーダーシップカンファレンス 2015 平成27年8月21日(土)～22日(日) 立教大学	学術教養センター 山川 修 教授
Fレックス第6回 FD合宿研修会 平成26年9月9日（水）～10日（木） 仁愛大学	経済学部 尹 淑鉉 教授 経済学部 杉山泰之 准教授 看護福祉学部 平井一芳 准教授 看護福祉学部 笠井恭子 准教授 看護福祉学部 澤田敏子 講師 学術教養センター 北村知之 教授 学術教養センター 山川 修 教授 学術教養センター 徳野淳子 講師 学術教養センター 松本 涼 講師

福井県立大学学生による授業評価実施要項

1 目 的

学生による授業評価を通じ、教員が授業の内容および方法の改善を図ることにより、教育力の向上に取り組む。

2 対象教員

専任教員および非常勤講師

3 対象学生

学部生、大学院生、科目等履修生・聴講生

4 対象授業

(1) から (3) を除く授業科目

ただし、(1) から (3) については、学部・学科および教員が希望する場合は実施することができる。

(1) オムニバス授業

(2) 実験、実習（指導）、論文（指導）、研究、卒業研究、演習教科

(3) 実施期間終了後の集中講義

5 期 間

前期科目： 前期期末試験期間前の 2 週間

後期科目、通年科目： 後期期末試験期間前の 2 週間

集中講義は、原則、講義の最終日に実施する。

6 方 法

アンケート用紙にて実施する。

ただし、事前の申請により、LMSにて実施することができる。

7 項 目

評価は、下記項目について実施する。

(1) から (5) については、4段階評価とし、(6) については、自由記述とする。

ただし、下記項目に加えて、教員が質問を設定することができる。

(1) 受講の意欲

(2) 授業方法

(3) 内容の理解

(4) 関心

(5) 総合評価

(6) 感想等

8 評価結果の取扱い

評価結果の集計終了後、授業科目ごとの評価結果とあわせて、アンケート用紙を教員に送付する。教員がアンケート用紙を事務局に返却後、評価結果およびLMS実施データともに部局長および教育学習支援チーム委員の閲覧に供する。部局長は教育学習支援チーム委員とともに、必要に応じて授業改善のための話し合いの場を設ける。

評価結果は本要項の目的以外に使用してはならない。

9 評価結果の公開

(1) 評価結果の公開については、専任教員のみ、授業科目ごとの評価結果（授業科目名、教員名、質問毎の平均点）を学内LAN内のウェブページにて公開する。

ただし、7 (6) 感想等の記載内容については、公開しない。

評価結果の公開に当たっては、全体の集計結果についてもあわせて公開する。

(2) 授業評価に対する専任教員のコメントを、学内LAN内のウェブページにて公開する。

【 附 則 】

平成26年 4月 1日 施行

平成27年 5月26日 改正（期間）



福井県立大学 授業に関する調査

質問および回答用紙

この調査は、県立大学が皆さんに提供している教育を、より良いものにしていくために
行うものです。あなたが現在受けているこの授業についての調査にご協力ください。

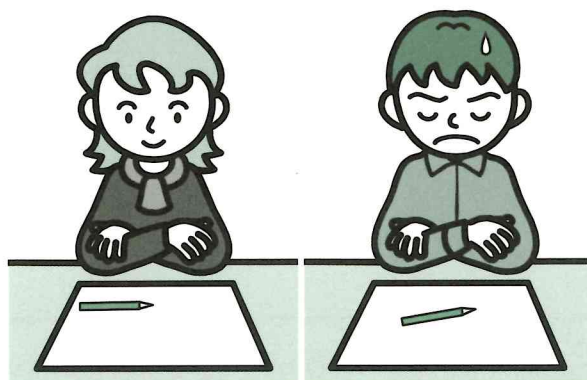
回答は裏面の回答欄に記入してください。

あなたに当てはまるもの、あなたの意見や感想にもっとも近いものの番号をマーク、記述
してください。

記入上の注意

- 1：選択回答の場合はマークシート記入を、記述回答の場合は対応する空欄に記述
してください。
- 2：記入は濃い(B程度)鉛筆またはシャープペンシルで強く書いてください。
- 3：訂正する場合は、プラスチック消しゴムで完全に消してください。
- 4：用紙は、コンピュータ処理しますので、折り曲げたり汚したりしないでください。

マーク例) 良い例 (2) ... ▶ ● 悪い例 (2) ... ▶ ~~(2)~~ ~~(2)~~ ~~(2)~~ ~~(2)~~



本アンケートによる(全学、学部別等)授業評価結果は、本学
ホームページ上で開示予定です。

過去の集計結果は <http://www.fpu.ac.jp/group/fd/> を
御覧ください。

学籍番号の上から1ケタ目の数字をマークしてください。

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨

例) 平成25年4月入学生・・・①

学籍番号の上から2ケタ目の数字をマークしてください。

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨

例) 平成25年4月入学生・・・③

学部生 所属の番号をマークしてください。

1: 経済学部経済学科 2: 経済学部経営学科 3: 生物資源学部生物資源学科 4: 海洋生物資源学部海洋生物資源学科
5: 看護福祉学部看護学科 6: 看護福祉学部社会福祉学科 7: 科目等履修生・聴講生

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦

大学院生 所属の番号をマークしてください。

8: 経済・経営学研究科 地域・国際経済専攻 9: 経済・経営学研究科 経営学専攻 10: 生物資源学研究科 生物資源学専攻
11: 海洋生物資源学研究科 海洋生物資源学専攻 12: 看護福祉学研究科 看護学専攻 13: 看護福祉学研究科 社会福祉学専攻 14: 科目等履修生・聴講生

⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭

質問および回答欄

Q1 この授業(課題、レポート、予習復習を含む)に意欲的に取り組みましたか?

①意欲的に取り組まなかった ②あまり意欲的に取り組まなかった ③ある程度意欲的に取り組んだ ④意欲的に取り組んだ

① ② ③ ④

Q2 先生の講義の方法(話し方、板書、プロジェクターの使用、学習支援システム等の活用)はどうでしたか?

①不適切 ②やや不適切 ③まずまず適切 ④適切

① ② ③ ④

Q3 授業中の内容はどの程度理解できましたか?

①理解できなかった ②あまり理解できなかった ③ある程度理解できた ④理解できた

① ② ③ ④

Q4 この授業の分野への関心は高まりましたか?

①高まらなかった ②あまり高まらなかった ③少し高まった ④高まった

① ② ③ ④

Q5 この授業を総合的に評価してください。

①良くない ②あまり良くない ③まずまず良い ④良い

① ② ③ ④

Q6 授業を受けた上での感想(先生の授業への熱意、方法、教材、授業内容はシラバスに即していたか、など)を良かった点あるいは不備な点について自由に書いてください。この欄の記述に対する担当教員のコメントを、後日ウェブ上に掲載します。

Q6の自由記述欄

Q7 教員設定の質問(別紙参照)

① ② ③ ④

Q8 教員設定の質問(別紙参照)

Q8の自由記述欄

2.1 経済学部（尹淑鉉・杉山泰之）

経済学部の本年度のFD活動は、①「授業評価」（前期、後期）、②「授業公開」（4件、うち前期3件、後期1件）、③4年生の演習Ⅱの進め方についての意見交換を目的とする教員懇談会を開催した（後期）。また、上記の以外にも、演習や外書講読の進め方等についての話し合いなど、FD活動に関する自主的な議論は日常業務の中でも行われている。

2.1.1 授業評価アンケート

<2015年度前期授業評価アンケート>

問	1.意欲的受講	2.授業方法	3.内容理解	4.関心	5.総合評価
経済学部 平均	3.24 (+0.02)	3.33 (+0.04)	3.15 (+0.03)	3.19 (+0.03)	3.35 (+0.03)

<2015年度後期授業評価アンケート>

問	1.意欲的受講	2.授業方法	3.内容理解	4.関心	5.総合評価
経済学部 平均	3.24 (+0.02)	3.35 (+0.02)	3.15 (+0.01)	3.22 (+0.03)	3.36 (+0.01)

- 2011年度以降、前期科目、後期科目とも、全ての項目で増加傾向にあった。その中で、比較的高い数値となっていた「2. 授業方法」と「5. 総合評価」は高めに安定し、どちらからといえば低い数値であった「1. 意欲的受講」と「3. 内容理解」が上昇傾向にある。昨年度からこの傾向はあったが、本年度も高めで安定している。
- 前期、後期ともに、前年同期の評価を全ての項目で上回った。
- 前期、後期ともに、特に経営学科の評価が高く、全ての項目で全学の平均を上回った。

2.1.2 授業公開

(1) 方針

経済学部の授業公開ポリシーは、従前通り、具体的な授業参観を通して公開者・参観者の授業改善に資することを目的とし、公開者と参観者の間で率直な意見交換を行うことである。

(2) 実施実績

[前期]：2件の授業公開が行われた。

授業名：基礎ゼミ

日時：2015年7月9日（木）、3限（13:00～14:30）

担当教員：松岡孝恭

場所：情報処理演習室Ⅱ、E105

概要

この日の基礎ゼミは情報処理演習室で行われた。受講生は計量経済学の理論を実践するためにプログラミング言語を学んでおり、それを活用して実際にシミュレーションを行うことで、統計学に対する理解を深めていった。なお、オリジナルの資料が配布されており、学生

はこの資料を参考にしながら、課題に解決に向けてお互いに話し合い、報告していた。

参加教員からのコメント（順不同）

- オリジナルの資料を使うなど、授業準備がとても丁寧に行われている印象を受けた。
- 統計分析に必要なプログラミングの基礎を、初歩から段階的に学べる体系になっている。
- 課題について学生が自ら考える時間を十分に確保しており、とても効果的だと感じた。
- 学生とのコミュニケーション量が多いことから、学生がリラックスして学んでいる印象を受けた。
- 授業についていけない学生のケア、個々の学生の理解度を確かめる取り組みなどをどのように行っているか。
- 学生がプログラミング言語を学ぶ上で、最終的な目標や到達点をどのあたりに設定しているのか。

担当教員からのリプライと提案（順不同）

- 演習Ⅰで行う予定のデータ分析に必要な能力を養うため、基礎ゼミではプログラミングを取り上げた。
- 基礎ゼミの中で、検定統計量の性質をシミュレーションによって確かめるところまで到達できた。
- 受講生全員が統計学の講義を受講していたので、理論的な説明はゼミの中で余り詳しく行わなかったが、統計学の講義資料を基礎ゼミの資料に反映させることで、学生が内容を復習しやすくなるよう工夫した。
- ゆっくりと理解を進めている学生もいたことから、宿題やテストは課さず、授業時間内に課題を解いてもらうようにした。
- 「コミュニケーション量が多く、学生がリラックスして学んでいる」という感想を頂けたことは大変嬉しい。
- 受講生とコミュニケーションを密にとり、課題を解決するために必要なヒントを少しずつ与えながら、学生がなるべく自力でよい発想にたどり着けるように手助けをした。
- FD 担当教員への要望として、見学をする回の講義の概要を予め教えてほしい。

授業名：演習Ⅰ

日時：2015年8月5日（水）、5限（16:20～17:50）

担当教員：山崎淳

場所：共通授業棟 L210

概要

この日の演習では、中小企業経営者との意見交換会に向けて、演習Ⅰの受講生がチームごとに発表を行った。①「ファミリービジネスの成長戦略」、②「大卒人材の採用を視野に入れた人事評価制度」という課題を設定し、4チームに分かれて、M&A、業界での評判、コア人材育成や段階的育成などの提案をしていた。また、発表会は学生主体で会場の設営から運営、進行まで行っており、同ゼミの演習Ⅱを受講する4年生がよくサポートしていた。

参加教員からのコメント（順不同）

- 発表だけでなく、質疑や運営も含め、全て学生主体で実施できていた。また、3年、4年のゼミ生同士の連携もよく取れており、良い循環を感じた。
- 中小企業経営者との意見交換会という明確な目標が、ゼミ生の意欲的な取り組みにつながっているのではないか。
- 昨年もこの発表会を見学したが、発表会の形式は同じでも、テーマが異なると発表の方向性（性格）もずいぶん変わってくる印象を受けた。
- ゼミ生がとても積極的に発言できているが、学生から質問や感想を引き出すためにどのような工夫をしているか。
- 夏に行われる意見交換会の成果を後期のゼミの中でどのように活かしているか。

担当教員からのリプライと提案（順不同）

- 授業公開の機会を得ることによって日頃、試行錯誤し悩みながら指導している内容について、第三者の視点から評価、アドバイスをいただき、大変参考になった。
- 限られた時間で多くの学生に発言、議論をしてもらうことは難しいが、本年度はファシリテーターとして発言、議論を促す工夫をした。また、机の配置を「ロの字型」から「島型」にしたり、少人数チームでの議論、発表の機会を増やすなどを試みた。
- ゼミの3、4年生の連携については、演習Ⅰの学生1名に演習Ⅱの指導担当2名の体制をとっており、演習での発表、レポート提出等の際には、事前に指導（アドバイス）を受けるように促している。
- 意見交換会を含む夏合宿では、発表内容について経営者、他大学学生、中小企業支援機関職員、研究者へのアンケート調査を行っている。後期には、その調査結果（どのような評価が得られたのか、課題など）について検討したうえで次の学習に発展させるようにしている。後期は、「中小企業白書」を取りあげているが、夏合宿の経験が理解の助けとなっている。

〔後期〕2件の授業公開が行われた。

授業名：経済統計学

日時：2015年11月25日（水）、3限（13:00～14:30）

担当教員：佐野一雄

場所：L208

概要

この日の講義では、異時点間の消費配分という、消費選択に関する経済理論について、実例とともに理論的な解説を行い、その上で、現実のデータに沿ってその理論の当てはまりを考えるという内容であった。スクリーンにエクセルの画面を映し、それを操作しながら進めることで、学生自身がエクセルを使って回帰分析などの手法を扱うことができるよう配慮された内容であった。

参加教員からのコメント（順不同）

- L208 の機能を十分に活用していた。EXCEL は身近なソフトなので、分析に必要な操作を画面で見せながら進めていく点は有効だと感じた。
- 理論的な解説の際に現実的な事例を加えるだけでなく、その当てはまりの良さを分析するためには、どのようなデータがあるかも紹介していた。学生が自らデータを収集する際に役に立つだろう。
- 数値例を使って、効用関数のグラフを描いて見せるなど、ヴィジュアル面で理解を促進するような仕組みが効果的に組み込まれていた。
- オリジナルの配布資料も学生の理解の助けとなっていると感じた。
- 数式については、途中の展開や、数値を当てはめたときの具体的な式を、そのまま映し出しても良いかもしれない。

担当教員からのリプライと提案（順不同）

- 説得力を持たせるために、講義では経済学理論とリンクさせながら、現実のデータを使ってエクセルによる分析を繰り返している。
- 経済統計学の講義で最も重視していることは、経済学理論を基礎に現実のデータを使って考えること。経済学の理論に拘ることによって、学生の興味を引き出すことができ、現実についての理解も深まっていると考えているの。
- 毎回の講義資料は、講義で使用されているマクロ経済学とミクロ経済学の教科書にできるだけリンクさせながら作成し、必要なデータはあらかじめ準備している。
- 経済理論と密接にリンクした統計学の教科書があれば使いたいが、たいていは確率統計のウェイトが高すぎるため、オリジナルの資料を用意している。来年は資料を整理して、あらかじめ講義の全体像がわかるようなスタイルなど、さらに改善していきたい。

授業名：外書講読Ⅰ

日時：2016年1月18日（月）、5限（16:20～17:50）

担当教員：清水葉子・廣瀬弘毅（共同授業）

場所：L105

概要

中期計画における「外国語による授業」の3年目として、「外書講読Ⅰ」（2年次後期必修）において、英語によるディベートを実施した。本講義は、一昨年度に3名（新宮・廣瀬・清水）が共同で行い、昨年度2名（新宮・清水）、3年目となる今年度も2名（廣瀬・清水）で行った。スケジュール等の詳細は、昨年の報告書を参照していただくとして、今年度の授業概要と、昨年度からの変更点を中心に述べる。

授業を実施した結論として、外国語教育の重要性を否定するものではないが、専門教育を英語で行うことに二面性があることを強調したい。専門教育を英語で行うことは先進的な試みではあるが、様々な条件が整わない限り、日本語で行う場合に比べどうしても学生の理解が浅くなるため、内容面での専門性を犠牲にすることに加え、半期の英語ディベートのみで学生の英語能力が大きく伸びることは期待しにくい。一方で、ディベートの実施は、学生同

士のグループワークとしては教育効果が高く、また、学生がディベートを通じて賛否両論の立場に立つことから、社会的な課題を複眼的な視点で見る能力の涵養につながる。グループワークとして大きな教育効果を得た反面、語学教育と専門教育の一石二鳥を安易に期待するのは、早計だと考える。

授業の進行としては、①全体の15コマのうち、約半分で英文テキストの輪読と、内容に関する講義を実施し、②テキストに沿った内容でディベートの主題を確定して、③学生を賛否それぞれのチームに分けて主張内容やその根拠、反論への準備等を英語で行えるよう準備をし、④2回に分けて実際の英語ディベートを行う、というものである。

具体的なディベート授業の進め方（ディベートのためのチーム編成、賛否の主張の決定、当日のチームの配置、事前の打ち合わせ、ワールド・カフェのインストラクターとの協力関係等）については、昨年度の報告書で詳細に述べられているので参照されたい。テキストも昨年度と同じ Michael Sandel “What Money Can’t Buy – The Moral Limits of Market”, 2012, Allen Lane を使用したが、昨年度とは異なる箇所を輪読した。

今年度の変更点は、英語ディベートの前に、日本語でのディベートを加えたことである。昨年度は、英語ディベートを2回実施する野心的な計画を立てたものの、最初から英語のみで準備をすると学生の理解が浅く、やや消化不良となった。この反省から、一昨年度の方式に戻して、事前にいったん日本語ディベートを行って、内容を日本語で深く理解したのちに、改めて英語ディベートへ繋ぐ方法をとった。

ワールド・カフェのインストラクターからは、引き続き、ディベートについての基礎的なレクチャー、学生の能力に応じたディベート形式の選択、模擬ディベートの実施、ディベート当日のファシリテーションまで、多大な協力を得た。インストラクターは、高等学校でのディベート指導の経験が豊富で、学生に対して適切な指導をしていただいた。今後も、学部での語学教育へのご協力を強く希望する。

参加教員からのコメント（順不同）

- ディベートの発言を板書しながら進めているのが良かった。学生にとってとても丁寧な方法だと感じた。
- 発言までによく内容を吟味する時間が与えられているのがよい。
- ディベートの議論を有意義なものにするための準備の時間と、自由に考えさせる時間の両方があり、そのバランスがよく取れている。
- 学生同士が、予想していない意見に対して反対意見を考え、それを英語で表現する姿勢に感銘を受けた。
- 全員に発言の機会があっても良いかもしれない。
- 途中でフロアーの学生からコメントをもらっても良いかもしれない。
- 初めの主張とそれに対する反論まではあらかじめ用意させて、再反論から考えさせるようにしても良いかもしれない。
- 参加者全員がディベートに前向きに取り組んでいたと感じる。学生のモチベーションを高めるために何か工夫している点があれば知りたい。
- 英語に苦手意識を持っている学生への対応について聞かせてほしい。

担当教員からのリプライと提案

- 丁寧な進行に総じて好意的なコメントをいただいたが、ディベートの進行に時間がかかりすぎ、学生が用意した主張の多くが発言されずに終わってしまった。ご指摘の通り、進行の効率化を図り、発言者の数を増やす必要があることは反省点の一つである。
- 教育効果に関して、初年度の教授会報告で指摘したメリット・デメリットを再掲する。

①グループワークとしての効果：

1. ディベート前提のテキストの読み込みなので、表面的に翻訳するだけでなく、学生どうしで内容についての意見・賛否を活発に討論でき、内容理解に資した。
2. 授業時間外にもチームで集まって、論点やその根拠を明確にするための準備作業を積極的に行った。
3. チーム内のメンバー間で関心や能力の濃淡がコミットの度合いを決める面が出てしまうというグループワークのデメリットがここでも見られた。
4. 参加型学習故の学生の満足度は極めて高く、翻訳と解説のルーティンな外書講読よりは面白がっていることが明白であった。

②英語教育としての効果：

1. ディベートのために主張にそった表現をテキストから拾ったり、事前に主張を英訳したりすることから、個別の英語の勉強時間だけでも確実に増えた。
 2. 相手の意見に対してその場でなんらかの反論が必要となり、英語を話す強い契機になった。
 3. 学生自身も実感したと言っていたことであるが、何よりもロジカルに思考する訓練として良い。日本語でのややルーズな発言ではすまないが故の論理の練り上げが、内容についての深い理解に結びつく。
 4. 上記と重なるが、ディベートでの論点補強の強迫が経済学の理論の動員を促進し、結果として経済学の考え方の理解も深まった。
 5. ワールド・カフェのスタッフになじみができ、カフェに入って英語を使うことのハードルは下がったと思われる。
 6. 数ヶ月の授業で語学能力が上がることは考えにくく、これをきっかけに何割かの学生が英語勉強を始める、あるいはカフェに出入りするといった継続性のきっかけになることを期待したい。
- 複数教員の共同授業を通して、教員間の打ち合わせや指導方法についての意見交換を通じて、教育方法についてお互いに学び合うことが多く、また学生も教員同士の対話から何がしかを得てくれたものと考ええる。
 - 教授会では、この試みを学部として一般化することには強い異論があり、また、本来の「外書講読」の原則に外れているのではないかという指摘もあった。
 - ワールド・カフェのインストラクターから多大な協力を得ており、授業継続のためには今後も協力が不可欠である。
 - 実務的な課題：ディベートに適した教科書の選定、費用、場所、曜日の調整。

2.1.3 部局内FD研修

経済学部懇談会

日時：2015 年 12 月 16 日（水）、3 限（13:00～14:30）

場所：経済学部棟 10 階教授会室

テーマ：演習Ⅱのあり方について

2015 年度の経済学部 FD 研修としての懇談会では、学生の就職活動が長期化する中で、演習Ⅱをいかに効果的なものにしていくかについて、それぞれの教員から演習Ⅱの現状と卒業までにどのような取り組みをしているかを聞いた。その上で、特に注意している点や気になる点などについて意見交換した。両学科から 14 名が参加した。

懇談会での議論の概要（順不同）

- 前期に学生が集まらない問題についての意見
県外の学生が多いこともあり、ほとんどの先生が、（県内外問わず）前期に学生が半分以上欠席しておりゼミ運営が難しいという意見であった。しかし、学生の就職活動の実践的なアドバイスをすることで、県内学生はほとんどが出席するゼミもあった。
- 前期のゼミ運営についての意見
→ 半分（40～50 分）を就活アドバイスに使い、残りの半分以上を卒論の指導に使う。
→ 出席した学生が困らないよう、本の 1 つの章を決めて読ませたり、新聞の時事問題を読ませるなどしている。
→ 1 回につき 2 名が発表するように工夫（1 名が欠席しても発表が可能）
→ 5 月以降内定が決まった順に、進む分野を決めて勉強として発表させている
- 卒業論文指導の方法についての意見
卒論の内容に差はあるが、論文という形で完成させること自体に意義があることや、一人一人が自ら設定した課題について詳しく調べ、報告することが大切であることなどがあげられた。いずれにしても、卒論は、学生自らが一つの問題について、自分なりに調査し、考えをまとめる大切な機会であるという点は、参加教員の統一的な見解であった。細部においては、次のような意見があった。
→ テーマを決める時期について：前期のうちに、夏休み中に、遅い場合は 10 月に入ってから決めるなど、時期はそれぞれであった。
→ 卒論を書く人数について：100%が書く、13 人のうち 11 人程度、2～3 人、などばらつきがあった。
→ 卒論の指導方法：たいてい 1 対 1 で指導するゼミが多く、グループで書くゼミもあった。いずれにしても、本格的な卒論指導は原則的に後期に入ってから始まるとのことであった。
- 卒業論文指導における課題
→ パワーポイントを作成したり、プレゼンが上手な学生でも、全般的に学生たちの「書く能力」は落ちているため、「書く」指導に大変なエネルギーがかかる。
→ 特に、本文中での引用方法について指摘しなければいけないことが多い。その度に説明をしなければならない点が難しいと感じる。
→ 後期に入ってから「卒論を書く」と言い出す場合、期間的に余裕がなく、論文の質も懸

念されるが、現実のところ認めざるを得ないという問題がある。

→卒論を書く学生が多い場合、1人で指導に当たることは大変なエネルギーがいる。最後は個別指導になるが、途中経過の報告などの形で演習の時間に学生同士に議論させることも有効である。

2.1.4 授業改善についての課題と展望

FD活動の本旨は個々の教員の創意と工夫をサポートすることである。これまで同様、本年度もこの基本方針の下で、授業公開、部局内FD懇談会などを行ってきた。

FD 懇談会「演習Ⅱのあり方について」を通じて

懇談会を通じて演習Ⅱの運営の課題が幾つか浮き彫りになったが、大きく2点に絞ることができる。就職活動期における演習の運営上の課題と卒業論文の指導に関する課題である。就活期における演習の運営については、県外で就職活動を行う学生も多いことから、ゼミによっては欠席者が多くなってしまった回もあったようである。このような現状では、教員はただ就職活動と演習の間で学生たちが両立できるように最大限の工夫と配慮を手探りするばかりである。この時期の演習Ⅱの運営は難しい舵取りを迫られているが、手探りのなかに各教員の個性と努力が反映されているのを感じた。

なお2015年度の場合、就職活動が長期化したこともあり、卒業論文を書く期間は短くなる傾向にあった。このような現状では、学生たちがたとえ卒論を書いたとしても達成感のある論文に仕上げることは非常に難しくなる。近年の学生たちは書く力が落ちているといわれるなか、卒論は学生たちが書く力を向上させる絶好のチャンスである。しかしながら、短い期間に多くのゼミ生たちの卒論について満足のいく指導をすることは容易なことではない。懇談会では、各教員から学生たちの書く力を向上させるためのいろいろな工夫を伺うことができた。今後も、演習Ⅱの運営と卒業論文の指導において最大の教育効果を得るために、意見交換を重ねながら最善の方法を探っていくことはとても有意義であろう。

昨年のFD活動報告書でも言及したように、学生の答案やレポートは教員と受講者の間の最も重要なコミュニケーション・ツールである。その意味では、学生サイドからのフィードバックとして、定期試験の答案はもちろんであるが、レポートや小テスト等を活用することも重要である。これらを定期的に行い、答案やレポートをしっかりと確認することは、学生の理解度を適切に把握することにつながり（必要であれば）授業改善に向けた対策も立てやすくなるだろう。

授業方法や到達目標について各教員は常に試行錯誤しているが、その過程において自らのやり方に不安を感じたり、疑問を抱くこともある。授業公開やFD懇談会を通じて、他の教員の極めて具体的なやり方や考え方についての情報を得て、それをカスタマイズすることは、そのような問題の緩和に大いに役に立つだろう。常日頃から様々な形で教員間の連携を図っていくことが大切である。

2.2 生物資源学部（平 修、林 潤）

2.2.1 授業評価について

本年度前期の学部講義についての評価は、「意欲的受講」3.15（昨年度 3.13）、「授業方法」3.17（昨年度 3.18）、「内容理解」3.01（昨年度 3.02）、「関心」3.08（昨年度 3.09）、「総合評価」3.20（昨年度 3.22）であった。これらは、全体（全学）集計（「意欲的受講」3.25、「授業方法」3.34、「内容理解」3.15、「関心」3.20、「総合評価」3.37）と比較して、殆どの項目にわたってやや低い。また、後期の学部授業についての評価は、「意欲的受講」3.16、「授業方法」3.25、「内容理解」3.08、「関心」3.18、「総合評価」3.30であった。これらは、全体（全学）集計（「意欲的受講」3.25、「授業方法」3.37、「内容理解」3.17、「関心」3.22、「総合評価」3.38）と比較して、全項目にわたってやや低い。これらの結果から、生物資源学部では、専門科目である講義内容を比較的多く含むカリキュラムであるから、それに真剣に学習に取り組む学生から、難しいと感じられていることがわかる。しかし、総じて、良好な評価を受けているとも考えられる。今後は、現在の方向性を基本に、学生との対話を充実させ、理解度をきめ細かく把握しつつ、問題点を洗い出し、講義を進める工夫を継続することが肝要と思われる。

大学院の前期、後期講義についての評価は、「意欲的受講」前 3.45、後 3.16、「授業方法」前 3.57、後 3.52、「内容理解」前 3.29、後 3.20、「関心」前 3.59、後 3.40、「総合評価」前 3.73、後 3.44 であった。これらは、全体（全学）集計（「意欲的受講」前 3.56、後 3.43、「授業方法」前 3.74、後 3.71、「内容理解」前 3.50、後 3.45、「関心」前 3.68、後 3.64「総合評価」前 3.75、後 3.71）と比較して、全項目にわたってわずかに低い。この結果から、大学院では、学生が高度な講義内容の習得にわずかに難しさを感じているものの、院生として専門科目に対しての真摯に取り組む様子がうかがえる。従って、大学院では、学部以上に、学生との対話を充実させ、理解度をきめ細かく把握しつつ講義を進める工夫を進めることが必要と思われる。

2.2.2 授業公開の方針と実績

（1）方針

生物資源学部では、各教員が、必要に応じて自分が担当していない講義を聴講し、授業内容を直接確認できるよう、全講義を対象に、希望者が事前に担当教員に連絡することでいつでも参観できる「随時公開制」を採っている。

（2）実績

今年度、担当外の講義を参観した教員はいなかった。本学部では、後述するように担当教員による講義の工夫等をアンケート調査により共有し、授業内容の連携を進めている。学生によるFDアンケート調査からは、教員に対するクレームはないが実態とあっているかはこれだけでは不明瞭である。以上の点から、現行のカリキュラムは無理なく実施されていると判断するが、授業への参観企画に、教員の動員可能であることは年度末毎に確認することとした。

2.2.3 授業改善の取り組み

生物資源学部では、2011 年度より、各教員が、学生の理解を助けるために行っている、授業（学生実験を含む）上の工夫をアンケート調査により収集し、全教員でその情報を共有する取り組み

を行っている。

本年度は、2月4日にアンケート用紙がメール配信され、教育学習支援チーム員による回収・集計を経て、3月2日に結果が全教員に通知された。

本年度のアンケート項目は、「教員個人が授業改善や学生の意欲向上のため工夫していること」、「授業を担当しての感想など」、「学生の理解度を把握するための試み」、の3点であった。また、アンケートへの回答は任意とし、率直な意見の収集に努めた。

なお、この取り組みは、自身の講義をより良くする方法を考える上で大変参考になると、多くの教員から好評価を得ている（2013年度報告書、2.2.4「授業改善についての課題と展望」参照）。

アンケート結果を以下に記す。

・教員個人が授業改善や学生の意欲向上のため工夫していること

理解しやすいように、整理された板書を心がけている。 教科書の文章だけでは理解しづらい内容については、動画を見ることにより理解を助けている。
担当科目の目標に、身近な食品成分（栄養素、非栄養素、添加物などなど）の役割や、食品加工・食品劣化にともなう成分変化を理解し、日常生活で上手に食品とつきあえるようになること、を掲げています。このため時々、現物や関連品を持参して回覧するなど、プリントと板書だけで終わらないようにしています。また授業中にできるだけランダムに指名して、クイズ形式で答えさせる機会を時々設けています。
話すことにだけ集中するのではなく、受講中の学生達をよく観察するようにしています。 アンケートを取るまでもなく、彼らの顔色で意欲がわかります。つまらなければ寝ますし。 講義の内容が、研究や社会でどのように役立つのかについて、実例で説明すると学生達の関心が高くなることをいつも実感しています。
学生が知っているであろうという目線をやめて、単語一つ一つに対して、補足説明を加えるようにしている。 pK_a のPと K_a の意味など。
模式図などを多用する。模型を使う。
初めに授業の流れをまとめたプリントを配り、その日の授業内容を示しました。授業で覚えて欲しいキーワードをかなり厳選しました。板書を中心に行いました。簡単な実験を行ったり、子供向けのおもちゃなどを利用したりして、理論は難しいけれども、身近に利用されていることを示すことで、興味を惹くように心がけました。
講義評価が例年高くないことも鑑みて学生が分からないのは自分の説明能力に問題があると捉え、ひとりよがりの、早口の説明にならないように、注意した。また、複数で指導する学生実験時に、他の教員の説明模様を参考にし、自己研鑽した。

授業は基本的には教員から学生に対して行うものであるが、一方通行にならないように工夫している。特に「技術者倫理」の授業では、世の中で実際に起こった事例を取り上げて、どのような問題点があったか、自分であればどう対応したかなど、学生自身に考えてもらい、グループで話し合いを行い、発表してもらう形式を取っている。さらに、授業の中でレポートも作成してもらい、常に頭を働かせていないといけない状況を作っている。このような全員参加型の授業により、自分の考えを述べたり、人の意見も聞いて全体をまとめ、他の人にわかりやすく説明できる力を身につける訓練をしている。これは、就活や社会に出た際にも役立つと考えている。
3 年次生選択の講義（植物病理）では、講義終了時にミニツツペーパーへの記述を実施している。内容としては、当日の講義内容に関する設問および講義内容に関する自由記述欄を設けており、質問・依頼事項等があれば次回の授業の冒頭にて説明をするようにしている。1 年次必修の生物学 I については、半数近くの学生が高校で生物を全く勉強していないため、教科書に関連した最新の話題を写真・配布物等を用いてできるだけ紹介するように心がけている。
講義冒頭の 15 分を前回の授業の復習にあてている。
学生の学習意欲を向上させるために、卒業研究や今後の科学系の仕事において、本講義がどのような点から役立つか、説明しています。
生物物理化学実験：学生が主体的に学ぼう、以下の二点を工夫した。 ①学生がチームに分かれて、実験に関連した内容を調べさせ、まとめた物を発表させる時間を設けた（オリエンテーション時）。 課題例「Lambert-Beer の法則」、「紫外部に吸収を持つアミノ酸のスペクトル」、「酵素を用いたグルコースの分析法の比較」、「乳酸脱水素酵素アイソザイムの比較」など ②阻害剤存在下で酵素反応速度を求める実験を行わせ、反応速度やミカエリス定数に与える影響を考察させると共に、データの取捨選択について学ばせた。その結果を、各グループ毎に発表させ、実験結果から、結論を導くプロセスを互いに学び合えるよう工夫した。 化学 II：化学が得意ではない学生たちにも、関心を持たせるよう、以下のような工夫を行った。 ①初回の講義で、フェノールやクロロホルムなどの化合物、クローブなどのスパイス、セージなどのハーブが経験的に、ヒトの生活に役立てられて来たことを講義した上で、それらの化合物やスパイスの利用法などについて、チームに分かれてまとめさせた上で、発表させた。講義の理解度を知る、およびグループワークを行わせる、両方の意味を持たせたつもりである。 ②演習を行う日程を設け、問題を解かせた。日常の講義の中でも、問題を解かせてはいるが、今年は日程の余裕があったため、復習の時間が取れたと思う。 ③ニオイを持つ化合物などを例に、分子模型を触ったり、ニオイを嗅ぐ経験などをさせ、五感で化学を感じ取る工夫を行った。
できるだけ、具体的な生活に密着したことを例にとって説明している

・授業を担当しての感想など

演習問題を解く時間をとれなかった。
関心を持って聞いてくれる受講生がいますと、担当していて気持ちがいいですね。
遅刻者が増えているように思います。 特に実験の時には困りますので、入試のように遅刻制限時間を設けたいです。
必修でも遅刻する、5回休むなどがおおいように思われた。 韓国の聴講生が一番熱心であった。
一生懸命に聞いているが、理解していない学生が多くなった。
3年生後期の授業ですが、興味を持って受講する学生も数人いるので励みにはなります。
授業をまじめに聞いて教えられたことを理解し、覚える努力をしている学生と、授業に出てもほとんど聞いていない学生がおり、試験をすると理解度の落差が激しい。したがって、試験問題をすべての学生がそこそこの点数が取れる内容にすると、できる学生には易しすぎ、逆にすると、点数を取れない学生が多数出ることになり、どのレベルに合わせた授業内容にするのか、悩むことが多い。
昨年度までうまく機能していると思われたことが本年度はほとんどうまくいかない、というようなことに直面することが多かった。期間の途中でも、授業の進め方を臨機応変に対処する必要があると感じた。
熱心な学生が多く、講義がやりやすい。
講義方法が悪い等の問題点が無いとは言い切れませんが、講義内容を理解するためには、学生の自学・自習が必須であり、その意欲をどのように持たせるのかが、課題と考えています。
生物物理化学実験：意欲的である者、そうでない者が分かれてしまうため、意欲的でない者にも参加意識を持たせる工夫は必要と感じた。 化学Ⅱ：当初は化学に「苦手意識」を持つ学生が、顕著に目立っていたが、最終的には、ほぼ全員が合格レベルに達していたため、自分で「なんとかできる」学生が多かったのかも知れない。あるいは、基本から教える工夫が功を奏したのかも知れない。
授業に出てきても全くやる気のない態度の学生がある程度の人数いることに懸念を覚えます。

・学生の理解度を把握するための試み

ミニッツペーパー
小テストが一番有効です。
理解度は、そのまま授業態度に出ているように思いますが、「理解度の把握」というのが実際によくわかりません。期末試験で 60 点以上取れるというのが、1 つの基準でしょうか？
特になし。テストの点数で把握している。
毎回のミニッツペーパー
授業の中で演習問題を行いました。中間試験も行いました。
少し進むと、必ずそれまでのまとめを行ったり、簡単なテストを行うことで、少しずつ必要最低限の知識を習得できるように工夫している。
ミニッツペーパーに自由記述欄を設け、質問事項等については次回の講義の冒頭に答えるようにした。また、小テストをこまめに実施し、学生の負担を減らすようにした。
問題演習を実施している。
演習問題を解かせることを時間の許す限り取り入れて、理解度の把握（向上）に努めています。
講義途中で質問をし、口頭で答えさせる、あるいはミニッツペーパーで、質問に答えさせる、あるいはグループワークをさせた上で発表させるなど
前半は復習を兼ねた前回の小テストとその解説、後半に新規授業

なお、現在、FD委員に対していただいている、下記の意見に対しても、自由闊達なコメント、ご意見など頂けましたら幸いです。

・①教員間で、「1年生は自立していない」、「1年生は自立できていない」という視点で、改めて、担当の教科・実験の進め方等を、見直していただくことが必要ではないか、と考えています。行政的な中期目標に酷似しますが、2年生がグレーゾーン、3年生は自立したものとみなして対応していく方向性が共有できればと考えます。

自立の定義は、多々あるかと思いますが、全ての科目に対し、自分で疑問点を調べる、他人に説明できる形で文章・報告書・答案が書ける、この辺りを、3年生の目標に設定するのは、いかがでしょうか。

自立させることを目標とすることには賛成しますが、3年生で「自立したとみなす」は、残念ながら、一部の学生には無理があるかもしれません。

※「気づく」という能力は鍛えるのが非常に難しいと言われています。

考える機会・（コピペではなく、オリジナルな）文章を書く機会を作るには、宿題を出すしかないのでは???

賛成です。そのためには、教員側もアンケートなどを参考に、担当科目、担当教員を見直してもよいと思う。

とにかく、レポートを期日までに提出させるにはどうしたらよいのでしょうかあ、、、

授業をしていると、2年生（前期）では、学生から意見を聞いても反応が鈍い。また、学生どうしのつながりも希薄な感じがして、いろいろやってもらおうとしてもなかなか盛り上がらない。しかし、3年生になると、就活も多少意識してきているため、学生参加型の授業でも、それなりに盛り上がる印象がある。したがって、2年生で自立に向けた訓練を行い、3年生で自立させる方向性は良いと思う。

これを担保するための取組として学教の「導入ゼミ」があると思うのですが、生物資源学部としては「1年生は何も出来ない」ことを前提にして、主に実験講義を通じて、徐々に自立できるようにしていくべきではないかと思います。以前、化学実験を担当されていた山口先生は、講義を通じて実験操作だけでなく実験・講義に対する姿勢についても厳しく指導されていたと伺いましたが、そのおかげで多くの学生が2年・3年次には躊躇せず自らすすんで行動できるようになったのでは、と考えています。ただ、今このような指導を誰が担当するかとなると、大変難しい問題ではありますが…。

賛成です。

賛成です。伝わる文章を書けることだけでも、立派な能力だと思います。

観察法、実験法、計算法などの基礎的な事項は、「一度教えて、よし」とするのではなく、何度も「反復して学ばせる」のが重要と思います

②各々の講義・実験に、学生が「観客」あるいは「出席だけが目的」として参加している事例を、多少なりとも減らしていくために、学生の参加型の講義等を、15回の内で、1から2回程度でいいので、実施していただけないか、考えています。

調べさせて、発表させて、適切にコメントする形の講義を試行していただいて、感触を聞いてみたいと感じております。

小テストを2回に1回のペースで実施すると、「観客」ではいられなくなります。 学生実験では実施しています。調べさせてもスマホ検索のコピペで終わるリスクがあります。
JABEE の関係で小テストを実施することに億劫になっている部分もある。
うん、有意義だと思います。 ただ、講義では、なかなか時間に取りにくいです。 演習の時間を有効活用すべき。
緊張感を持たせるためにも、やるべきことだと思います。
賛成です。
現状でも、グループワークあるいは学生個人での「参加型講義」を試みています。学生の自発性を促すなどの色々な意味で有意義と考えています。他の先生のやり方も知りたいと思います。

③卒業研究は、先行研究分野を理解する、テーマを理解する、正確な実験を行う、結果を解釈する、考察する、他人に説明する、

これらを通年で実施して、「社会人力」を育成するのが目的と考えますので、卒業研究は、やはり必須科目とし、選択にはしたくありません。このためには、卒業研究に着手するための、最低限度のマナー、学力、経験を、3年までのカリキュラムを通じて、全教員の総力戦で、学生を鍛え上げる必要はあろうかと考えます。

卒業研究に着手するために「譲れないところ」は、議論しておく必要を感じております。

ハードルは、低めでもいいです。レポートが期日に間に合う、休まず講義に出れる、6割程度は講義を理解しているなどなど。

「譲れないところ」： 毎日、ほぼ時間通りに大学に来る。用事があるときは事前に連絡する。 学外共同研究者と約束することもあるので、平日に連絡なく休むのは×。 ※4年生複数名が同じスケジュールで卒論研究に従事していれば、連帯感や活気が生まれます。勝手に休むリスクも下がる気がします。
学生のための卒業研究とするならば、自分の学生指導・研究能力が、他の先生方と本当に同レベルであるかと問うた場合、まだ自己研鑽が必要であると感じる場面もある。学生のレベル到達と同様に常に自問自答が必要であると感じている。
現行の、リレー講義、学生実験で、2-3回休む、レポート未提出でも、15回の平均で60点以上ならば合格というのはいかがなものか。上記のレポートが期日に間に合う、休まず講

義に出れる、6割程度は講義を理解の実現は困難であると考ええる。
「譲れないところ」：単位取得の心構え カンニングに対して、「カンニングはない」という前提である。故に、どのようなペナルティを科しても問題ない。「その期の単位を全て不可」にするということでも問題がないと思う。社会に出てからこのことは役に立つと感じる。
その通りです。 それと、卒論研究の導入が必要です。 3年次生後期からの研究室分属（仮分属）を希望します。
レポートの提出を含め、今の学生はあまりにも受け身すぎて自主性が感じられない。自分で興味のあるもの、取り組んでみたいと思う対象を3年までに見出し、4年次の卒業研究で実際に手を動かして実験してみるという姿勢が必要ではないか？ それによって社会に出たときに、与えられた仕事や課題に対して、前向きに取り組むことができる。
自分自身、民間会社等の経験がないため、民間へ就職する学生へ、社会人とはという指導をする際に自信をもって伝えられない場面もある。共通する事は多いかとは思いますが。
本学部では、「学生は自分の研究の推進力、だから自分のテーマをやってくれる出来のいい学生にたくさん来てほしい」という考え方が現在も主流なのかなと感じています。カリキュラム改訂の議論でも、「自分の研究テーマをやってくれる学生を効率良く育てたい」という動機の影が頻繁に見え隠れしているように感じます（本当は、そうでないことを願っていますが）。もう少し純粋に、学生のためのカリキュラム作りという視点で議論ができればな、と思うことがあります。こらからのカリキュラム作りでは、テーマから自分で考えさせるタイプの指導の重要性がもう少し顧みられても良いように思います。
レポートの締め切りを甘く見る学生もいますが、教員間でスクラムを組んで、厳しく対応した方がいいと思います。実験ノウハウの取得、レポートの書き方など、「評価可能な」物は、学生一人一人がよりレベルアップできるよう、きめ細やかな指導が必要になって来ると思います。経験やマナーなど、客観的な評価ができない物に関しては、別の議論が必要だと考えます（欠席、遅刻、レポートの遅れなどに「当然」とでもいうような態度でいる学生がいますが、ケースバイケースでの対応が必要だと思う、という程度です）。

2.2.4 授業改善活動についての課題と展望

本年度、生物資源学部では、学部長と教育学習支援チーム員の懇談会を開催し、FD 活動を議論した。詳細は次のとおり。

日時：2016 年 2 月 4 日 午後 2 時から 30 分間

場所：生物資源学部棟 5 階 514 室

出席者：岩崎行玄（学部長）、平修（教育学習支援チーム員）、林潤（教育学習支援チーム員）

議事録

- ・ 全体的な授業のデザイン（学生への接し方）の提案
 - 1 回生；自立していないことを前提として授業を行う。
 - 2 回生；グレーゾーン。
 - 3 回生；ある程度自立していることを前提に授業を行う。
 - 4 回生；卒論研究に入る。
- ・ 教員側が頑張りすぎていないか？授業科目が多く、消化不良にならないか？
- ・ 中間層 6 割の学生のレベルアップを目指すにはどうしたらよいか？下位の学生に、引っ張られないようにするにはどうすればよいか？
- ・ 学科教員で意識の共有が重要である。

2.3 海洋生物資源学部（近藤竜二、松川雅仁）

2.3.1 授業評価について

海洋生物資源学部の平均は、前期後期とも全ての項目で全体の平均を下回っていた。特に後期の授業で「授業意欲」、「内容理解」および「関心」の評価項目の平均得点が低いことについては、この評価結果の内訳を精査した上で、学生がより理解しやすく、関心を持てるように授業内容の改善を心掛けていく必要があると思われる。

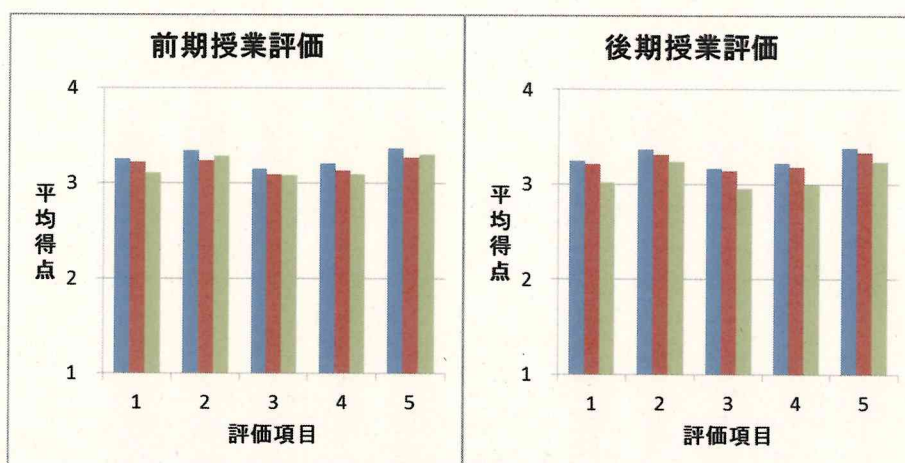


図 2015 年度前期および後期の海洋生物資源学部の授業評価結果

1 点が低い評価、4 点が高い

授業評価項目 1. 授業意欲；2. 授業方法；3. 内容理解；4. 関心；5. 総合評価

青色：全学の平均、赤色：海洋生物資源学部の平均、緑色：海洋生物資源学部の授業の平均

2.3.2 授業公開の方針と実績

(1) 方針

授業公開は、普段知ることのない他の教員の授業に参加し、担当教員や他の授業参加者との意見交換を通じて、自分の授業をより良いものにするためのヒントを得る機会の提供を第一の目的とする。授業公開は大学教育における画一的で理想型の模範授業を目指すためのものではなく、教育の自由が保障されるなかで、個々の授業内容に合わせたより特色のある授業を継続的に育むことが大切である。そのため、授業の内容について批判を行うのではなく、お互いを尊重しながら、特に授業の方法について教員同士が学び合うことを趣旨として実施している。

2015 年度は後期に 1 回授業公開を実施した。今回の授業公開は、例年行われている通常の講義ではなく、大学院生や 3 年生も受講する研究室のセミナーを対象に行った。また、授業参観の後に意見交換会を実施し、その交換会にセミナーに参加した学生も同席してもらい、生の貴重な意見を収集した。各研究室で開講しているセミナーの進め方について、以下のような貴重な意見交換をすることができた。

(2) 実績

2015 年度は以下の授業公開を行った。

公開科目名：専攻演習（4年次生）

担当：宮台教授、田原准教授

公開日時：2016年1月14日（木）13：00～14：20

場所：交流センター102教室（9：00～10：30）

参加人数：6名（細井、水田、神谷、兼田、高尾、近藤）

講義後の意見交換会 小浜キャンパス1F会議室(14：30～15：00)

意見交換会の参加人数：（細井、水田、兼田、高尾、近藤、田原、宮台、学部3年生1人、4年生1人、大学院生1人）

参加者の意見は以下の通り。

1) 工夫されている点、参考になる点

- ✓ 学生の発表が良かった。
- ✓ グループディスカッションで皆が発言していた。
- ✓ グループディスカッションでの内容を代表者が質問する。
- ✓ 3年生からも質問があった。
- ✓ 発表に対して質問をする前に、3つのグループ（3年生、4年生、院生）にわかれて話し合う時間が設定されていた。一般的にゼミでは発言者が決まっていたり、質問や意見が出なかったりしがちであるが、各グループでは活発な議論が行われ多くの質問・意見を生み出していた。学年別グループによる話し合いは、活発な議論を生み出す仕組みとして参考になった。
- ✓ 発表や質疑応答に対する時間の使い方が適切で、適度な緊張感を保っていた。
- ✓ グループディスカッションの取り組み。 — 学生同士で議論させることにより、疑問点などを素直に引き出す工夫がされている。質問数が増え、発表者の質疑応答に関するスキルの向上が期待できる。発表時間を設定し、限られた時間で自分の考えを発信する能力の向上を図っている点
- ✓ 学年ごとに質問項目を相談し合うのは良いアイデアだと思いました。当方のゼミでは、強制的に質問するように促した時期もありましたが、最近はそれもしなくなりました。
- ✓ セミナー発表・グループディスカッション・全体議論の時間配分が適切であったと感じた。
- ✓ グループディスカッションによって、学生の意見・疑問点を効果的に引き出している。
- ✓ 院生、4年生、3年生の3グループに分かれてディスカッションを行うことで、その後の質疑応答を活性化させようとしている点が参考になった。

2) 改善したらよいと思われる点

- ✓ 発表者が答えられない質問内容は次回の発表にどう生かされるのか？
- ✓ グループ内でも議論に参加出来ていない学生もいるように見受けられた点。
- ✓ 現状では、質問を実際に発信する能力の向上には繋がらない点。
- ✓ 特にありません。

- ✓ グループディスカッションのメンバーは、学年別に固定されているようですが、たまに違う構成にすることで、議論の内容に変化がでて、学生に良い刺激になるのではないのでしょうか？

3) そのほか、気づいた点・疑問点

- ✓ グループ内で発言しない人はいるのか？
- ✓ 答えられなかった質問は、どのように対応するのか？
- ✓ レジюме、パワーポイントの作成にどれくらい教員が関与しているのか？
- ✓ グループメンバーの固定・変動の善し悪しは検討する価値がありそう。
- ✓ 人数や院生有無などの変動にどのように対処するか。
- ✓ 同学年の学生同士間のディスカッションであれば、質問・意見を発言しやすい状況になっている。
- ✓ 次のステップとして、自分の意見を自ら発言できるようにするにはどのような方法があるのか？
- ✓ 質疑応答においてグループの 1 人が代表して質問事項をまとめて述べていたので、誰の質問なのか特定ができず、受講者個々人からの主体的な発信には必ずしもなっていない点が気になった。

(4) 今後の授業公開を行うにあたっての意見

- ✓ 授業公開の本来の意味は何かが問われていると思う。FD のデューティーとして行っている感が否めない。
- ✓ 特になし
- ✓ 教育系の専門家に授業公開に参加してもらい、改善点等を指摘してもらう

(5) 担当教員のコメント

- ✓ 回答を作成し、メールで発信している。概ね適切な回答を作成し、次回以降の発表に生かされているが、そうでない学生もいる。個人差とみるしかないように思う。質問への回答集の作成をもくろんでいるが、まだ実現していない。
- ✓ 毎回グループリーダーを決めて、そのリーダーが発言を促すよう指導している。リーダーとしての能力に乏しい学生は質問を引き出せないきらいがある。4 年生以降になると、コツがつかめてくるように思う。
- ✓ ハードルを下げざるを得ない。能力の向上に繋がっていないとは思えない。これまでの実績では、通常の学生であれば徐々に能力は高くなる。
- ✓ 代表として他人の意見を理解し、それをまとめる能力の向上を目指している。
- ✓ 大勢の前でも積極的に発言する能力を身につけることを目標としている。自分の知識にしよう、疑問を解決したい、というアクティブな気持ちが沸かなければ質問は出てきません。ある一定以上の知識を獲得して発表の内容を 7 割がた理解しないと、そういった積極性はなかなか出てきません。それには時間がかかります。ですから、最初は簡単で十分に理解できる内容について課題を設けて質問するトレーニングが必要かと思います。「海亀のスープ」という命題というかそんなゲームがあります。学生たちがひとりずつ質問して、課題を出した側はそれに、yes か no だけで答えるゲームです。質の低い質問とか、yes/no で答えられない質問は却下します。これは、まだやっていませんが、いつか試しにやってみたいと思っています。

- ✓ 慣れてきた段階で、それをするのは有効かと思っている。行きつ戻りつしながら少しずつ前進するのが良いと思う。
- ✓ 例えばひとつのグループしか作れない場合も想定される。その場合でも、教員はできるだけ発現せず、学生からの発言を促す。顔を突き合わせて話すと発言しやすいようである。
- ✓ 宮台はレジュメの添削は行う。パワーポイントの作成には関わっていない。発表後のディスカッションの際に指摘する。
- ✓ 若狭高校の授業研究に参加した教員は義務とは思っていないはずです。教育力の向上が目的です。それによって利益を得るのは学生です。
- ✓ 賛成です。若狭高校は教育系の専門家に授業を見てもらっているようです。
- ✓ 学生間の質問・意見を引き出すには効果があるが、自主的に挙手して発言までには達していない。次のステップをどう引き出すかが課題である。
- ✓ グループ内で発言するように、代表者が仕切るように指導していきたい。
- ✓ 代表者がまとめて質問するときに、誰の質問なのか特定しない方が自由な議論ができると思われる。当面は特定しない方向で進めていきたい。
- ✓ 質問数が多すぎて、その場で密な議論ができず、宿題になっている点は今後気を付けていきたい。

2.3.3 部局内FD研修

若狭高校 公開研究授業および授業研究会

日 時 : 2015 年 11 月 11 日 (水) 13:00~17:15

会 場 : 若狭高校

参加者 : 本学から宮台、富永、大竹、加藤、吉川、佐藤、また県内の中学校、高等

テーマ : アクティブラーニング

講 師 : 岩手県立大野高等学校 校長 下町壽男 先生

概要 : アクティブラーニングを取り入れた研究授業を参観した。「コミュニケーション英語 II」は2年生の理系クラスを対象とした授業で、ペアを作り意見を交換するといった生徒間のやりとりをメインとしつつ、各自がじっくり思考し英語を書く時間も充分に確保されていた。教科書の内容を各自が理解するだけでなく、内容を咀嚼し自分の意見として表現するところまでを求めており、これにより題材を深く考える機会が与えられていると感じた。1年生対象の「基礎生物」は体細胞分裂とDNA複製について考えるというもので、グループ学習を主体とした授業であった。教員による解説の後、各自がそれぞれ細胞分裂過程におけるDNA量変化をグラフ化し、同じ考えのものがグループを作るというもので、意見交換によるグループ間の移動や統合などを経て、最終的に全体の理解が正解に収束していく様子をみることができた。こうした授業を通じ、自分の考えを分かり易く説明し、また他者の意見を理解し比較検討する能力を養うことができると感じた。基礎生物の授業後に開催された授業研究会ではグループ討論形式でアクティブラーニングについて話し合い、福井大学 小林和雄 准教授(理科教育学)が総括した。また岩手県立大野高等学校の下町先生による講演「自らの言葉で語り、自分たちの意思で創り、進めるアクティブラーニング」により、アクティブラーニングに関する理解を深めることができた。(佐藤)

2.3.4 授業改善についての課題と展望

1) 海洋生物資源学部における今後のFD活動方針

例年通り年1～2回程度の授業公開を行うとともに、Fレックスの積極的活用を促す。

2) 海洋生物資源学部からのFD活動の提案

授業評価実施後、半年から1年経て結果が公表されているが、次年度以降の授業に反映させるためには、結果がまとまり次第ホームページで公表すべきであると考えます。

2.3.5 その他

Fレックス LMS 活用実績

2015年度における海洋生物資源学部のFレックスLMS活用実績は、開設数が専門科目全体の約1/4に当たる19科目、活用している教員数は全体の1/3に当たる8名であった。その内訳は、担当する科目のほとんどに活用を図っている教員、逆に活用していない教員に二分される傾向が見られた。なお、非常勤教員担当科目でのLMSの活用は見られなかった。具体的なLMSの活用内容について、活用頻度の多い教員の協力の下で簡単なアンケート調査を行った結果、その主な活用内容としては講義資料の配布、中間あるいは期末試験の解答例の提示に活用しているとのことであった。また、その他として挙げられたのは、履修学生からの欠席・遅刻の連絡、逆に教員から履修学生への一斉連絡に活用しているなどの報告もあった。なお、担当講義の改善に役立てるために、講義内容に対する学生の要望・意見の集約にLMSを活用している教員も一部に見られた。

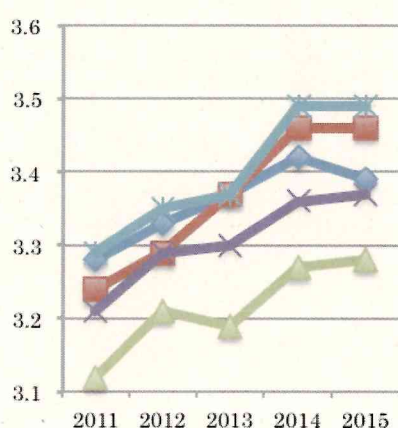
2.4 看護福祉学部（平井 一芳、吉川 公章）

本年度実施した授業評価、授業公開、授業改善への取り組み、FD 研修、授業改善についての課題と展望を以下に報告する。

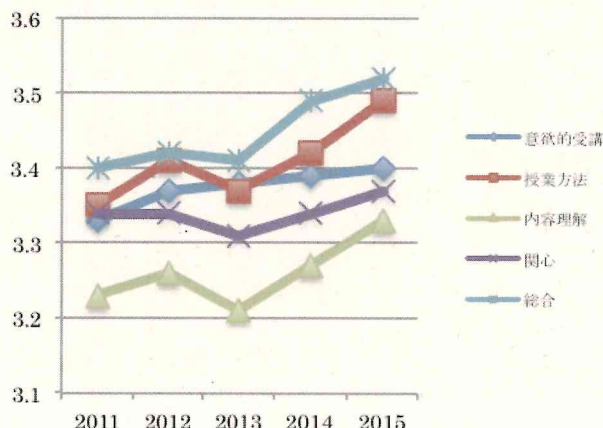
2.4.1 授業評価

2.4.1.1 看護学科

授業アンケートの結果について、まず昨年度と比較してみると、前期においては、「授業方法」、「内容理解」、「授業への関心」はほぼ横ばいであったが、「意欲的受講」のみ低下した。後期においては全ての項目が上昇した。次に過去5年間の推移をみてみると、前期では2013年に「内容理解」、2015年に「意欲的受講」が低下し、後期では2013年に「授業方法」、「授業への関心」、「内容理解」が若干低下したが、前期後期とも総じて上昇傾向であった。また、項目別得点においては、前期後期の何れの年度も「授業方法」と「意欲的受講」は高く、「内容理解」が最も低かった。以上のとおりアンケート結果からみた授業評価は、概ね良く特段の変化がないと言える。



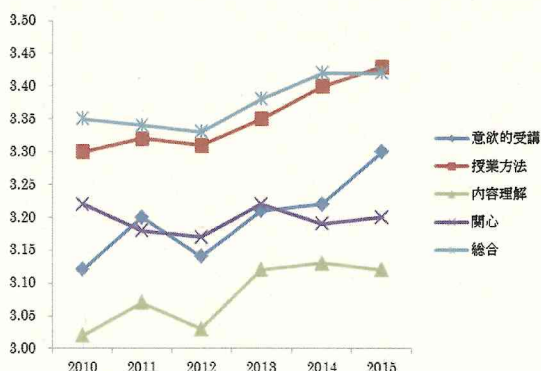
看護学科 授業アンケート結果（前期）



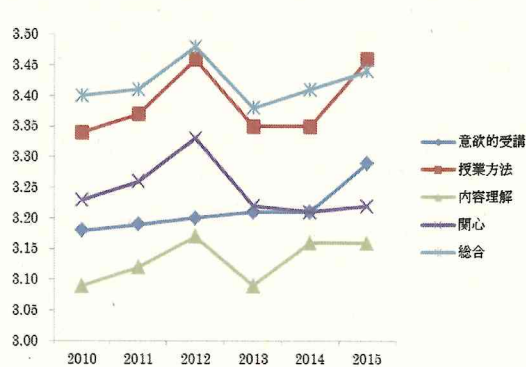
看護学科 授業アンケート結果（後期）

2.4.1.2 社会福祉学科

授業アンケートの結果について、まず昨年度と比較してみると、前期は、「総合」「内容理解」において少し下降したが、それ以外の項目全てにおいて上昇している。また後期についてはすべての項目において上昇している。「総合」「授業方法」「関心」には相関関係がうかがえ、学生の「関心」を引き出す「授業方法」の工夫の重要性を認識できる。「内容理解」は他の項目との比較では得点が低く、ここをどう深めるかがFD活動の大きな課題である。



社会福祉学科 授業アンケート結果（前期）



社会福祉学科 授業アンケート結果（後期）

2.4.2 授業公開

2.4.2.1 看護学科

前期、後期にいくつかの科目で随時公開したが参観した教員はいなかった。例年も同様の傾向にあり実質的に授業公開が成立しないのは、看護学科の授業科目がオムニバス授業や学外実習であることも要因のひとつと考えられる。今後はFD活動として看護学科の実情に応じた授業公開の在り方を検討する必要があると考える。

2.4.2.2 社会福祉学科

社会福祉学科では、例年、前期、後期にいくつかの科目で随時公開しているが、参観した教員はいない。実質的に授業公開が成立しない要因として社会福祉学科は学外実習（ソーシャルワーク実習、精神保健ソーシャルワーク実習）や演習科目が多く時間割がタイトであることも要因のひとつと考えられる。また現状として社会福祉学科独自の授業改善への取り組みが行われているので、以下（2.4.3.2）に報告する。

2.4.3 授業改善への取り組み

2.4.3.1 看護学科

（1）「学生の看護実践能力向上に向けた教育的支援を考える会」活動報告

看護学科の授業は、演習など複数の教員がかかわることが多いので、担当する教員同士で授業について検討を行う機会がある。そのような機会には授業方法についての話し合いが行われている。特に臨地実習においては、学生の思考・判断・行動を教員は目のあたりにするので、自ずと授業を振り返ること、授業改善へと繋がっていく。

看護学科では2012年度から教員有志で「学生の看護実践能力向上に向けた教育的支援を考える会」を発足し、「看護実践能力とは何か」、「教育的支援とは何か」について、実際の臨地実習における指導場面をもとに検討している。今年度の検討結果を以下にまとめた。

1) 平成27年度活動報告について

この会は看護学科の教員有志による活動で、4年経過した。今年度は、老年看護学実習における指導場면을資料として4回に渡って検討を重ねた。その経過の中で、次項で報告する平成27年度看護福祉学部KF枠研究費による研修会の検討資料とすることになった。

2) 平成27年度看護福祉学部KF枠研究費による研修会開催について

看護学実習の指導力の向上を目的とした研修会は今回で3回目になった。

2016年3月20日（日）13時30分から16時30分まで、看護福祉学部棟2階201多目的演習室において開催した。今回は、本学科の実習病院の臨床指導者（看護師）にも参加を呼びかけたところ、福井県立病院2名、福井県済生会病院2名の参加があり、本学科の教員を入れて参加者は13名であった。この研修の到達目標を①学生の変化は教員のどのような指導によるものかを理解できる、②指導過程を評価する視点を理解することができる、③自身の患者の見方・捉え方、学生への指導を振り返り、教育的役割を見直すことができる、④提出事例を振り返ることで、回復を促進する（患者のもてる力を活かす）ための組織的看護が行われているか考える。（見直す）ことができるとした。

研修の内容は、老年看護学実習の指導場面を共有し、意見交換をしながらグループワークを進めた。具体的には、看護する者としての学生の変化、学生の変化によってもてる力を発揮できたという患者の変化、それらの変化を導き出した教員の指導について、実際の指導場面をもとに2つのグループに分かれて検討、その内容を発表し、千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター政策・教育開発研究部教授和住淑子氏による助言を受けてさらに検討を重ねた。検討していくと、実習1日目にして学生は看護する者として看護の必要性や援助方法を見出し、どんどん変化していることが分かった。それは、教員が学生とともに患者のもてる力を観察し、あるいは学生から患者情報を得て判断しながら、その時々で瞬時に患者に必要な看護を学生とともに行う（学生には体験させる）ことで導き出されていた。このことが明らかになると、参加者から、「実習1日目で気づける学生って“すごい！”“早い！”」という感想が聞かれ、このような学生の変化を導く教員と自分の指導とどう違うのかという問いが生まれて、さらに活発な意見交換が行われた。その中で、この教員は患者のもてる力を引き出すという看護の視点を定めて患者を看ているとともに、学生のもてる力を信じて患者の看護を体験させていること、患者への責任は自分が負うという覚悟で患者を看て、学生を指導していることに気づいていった。

研修開始時に参加動機を語っていただいた。それによると、①実習指導において教員に頼ることが多く、臨床指導者として教育的関わりが不足していると感じている、②いずれは教育に進みたいので、自身の教育能力を向上したいと考えたため、③他の教員の指導を知って自身も向上したい等であった。研修を終えて、①学生の力を伸ばすスキルを学べた、②教育能力のみならず自身の看護観も大きく変わった、③患者のもてる力が引き出せる関わりができるよう学生に寄り添い、一緒に考えていきたい、自分の判断を分かりやすい言葉で伝えたい等の自己評価がアンケートに記述されていた。

臨床指導者（看護師）から、学生が受け持つと患者により変化が現れることは、この事例以外でもよく経験している。自分たちは患者のもてる力を引き出す看護ができないことが多いので、学生に申し訳ないと感じてしまうという意見に対して、講師から自分がしたい看護を学生にしてもらえていると思えばよいというコメントがあった。学生の頭（認識）が看護する者の頭になり、看護する者として行動できるようになるための実習指導には、“看護”と“指導”の二重構造があることを指導者自身が理解していることが必要だと、改めて感じ取ることができた。また、臨床指導者（看護師）から患者のもてる力を引き出す組織的看護を提供できるよう看護チームで取り組んでいきたいという意見も聞かれた。しかし、この事例における組織的看護に対する教員の教育的役割については時間がなく、検討することができなかった。

3) 次年度に向けて

次年度も臨地実習の合間で日程を調整しながら、新任教員にも会活動を紹介して、これまで同様に実習指導場面を用いて検討し、これまで検討した指導場面の教材化にも取り組んでいきたいと考えている。

（文責：赤川 晴美）

2.4.3.2 社会福祉学科

社会福祉学科は実習、演習教科を含めてオムニバス授業が多く、担当する教員間において授業内容や授業方法を検討する機会を設けている。特に実習、演習教科では複数の教員間の連携が必

要となり、授業方法等についての話し合が行われている。また、実習については、実習施設、機関等の実習指導者である社会福祉専門職者との連携を密にすることが学生の学習に対する意欲を引き出し、学修の成果を高めることにつながるようになるため、年に1回、実習指導者を本学に招いて、講演会と連絡等の会議を行っている。学内では、ソーシャルワーク実習担当者会議、精神保健ソーシャルワーク実習担当者会議を毎月開催し、年に2回合同での実習担当者会議も行っている。学生の今の状況を教員がいち早く察知し、実習を通して系統的に学生の学びを深めていくためにも教員間の情報の共有が必要と考えている。また学生一人ひとりの個性を活かしつつ、専門職者として必要な知識、技術の向上を目指し、個人面談を実施しながら学業等に意欲を持たせる試みをしている。

社会福祉学科の授業科目には、社会福祉士ならびに精神保健福祉士の国家試験の受験資格取得に関わるものが多く、国による教育カリキュラムの変更に応じて、実習施設や実習時間、授業科目の変更や組み替えを実施する必要がある。教育企画推進委員や科目担当者を中心にしてカリキュラムは検討され、教育効果を高めるためのカリキュラムの構成の仕方や授業方法について検討が行われている。今年度は「ソーシャルワーク実習指導」の改訂が行われたことを受けた実習関連科目を平成28年度より開講するための準備がおこなわれた。

社会福祉学科は、社会福祉士ならびに精神保健福祉士の養成に関わっているため、社会福祉士養成校協会、精神保健福祉士養成校協会、社会福祉学校連盟、公立大学協会社会福祉学系部会などに加入し、部会や連絡会議、セミナーなどに定期的に参加している。具体的には、それぞれの担当者を決定し、学科の代表として各種の部会、セミナーに分担して参加している。こうした機会にFDに関わる議題が取り上げられたり、FD関連のセミナーが実施されたりすることがある。FDに関連する部会、セミナーの個別の内容については(2.4.4.2)に報告する。そこで得た知見は持ち帰って学会会議で報告され、教員間で知識の共有が図られるとともに、それに関した話し合いも行われる。

また、学科としてのFD研修を実施し、今後の社会福祉教育の動向や本学のカリキュラム展開についての教員間相互の共通認識を深めるとともに、教育方法の開発の努めた。

2.4.4 FD 研修

2.4.4.1 看護学科

(1) 第6回FD合宿研修(2日間)

日時：2015年9月9日(水) 13:00～17:00、5日(木) 9:00～11:45

会場：仁愛女子短期大学 B101 講義室

主催：Fレックス

初日：セッション1 講演「ディープ・アクティブラーニングの実現に向けて」

森 朋子氏(関西大学)

セッション2 グループディスカッション

分科会1：授業現場におけるモチベーションクライシスの実態

コーディネータ：杉原一臣氏(福井工業大学)

分科会2：ラーニングポートフォリオの設計と評価-学習成果の可視化に向けて-

コーディネータ：田中 洋一氏(仁愛女子短大)

分科会3：新しい授業方法に向けての“反転授業”

コーディネータ：長水 壽寛氏(福井工業高等専門学校)

2日目：セッション3 スキルアップ講座「デザイン思考ワークショップ（ミニ）」

山川 修氏(福井県立大学)

田中 洋一氏(仁愛女子短期大学)

参加者：澤田 敏子

所感：

研修会の趣旨は参加教員のスキルアップと福井県内の高等教育機関の交流を促進することにある。私が本研修会に参加した理由は①FDの必要性和責務を感じていたこと、②現在、試行錯誤で取り組み中の研究課題にリンクする有用なテーマが研修に盛り込まれていたこと、③他学科、他大学の教員との情報交換を行い、自身のファカルティとしての見直しを行うことにあった。以下に研修の主な概要を報告する。

関西大学の森朋子先生の講演の主な内容は、1.学習研究の視点、2.なぜ、アクティブラーニングか、3.それには何が必要か、4.深い学習を促す授業デザインであった。

講演冒頭に学習研究とは学び手の立場で考えるもので、まだ分野としては確立していないと述べられた。森先生は、これまで250以上の授業に参加し学習研究を実践してきたという。アクティブラーニングのオーソリティである溝上先生、松下先生との違いは自身がフィールドワーカーであるとし、学生の現状についてのデータを示しながら、ディープ・アクティブラーニング（以下、DAL）の考え方とコツについて論じられた。

DALは、深い学習、深い理解、深い関与が存在し、深い学習は、①学習への深いアプローチ（2つ以上の知識が繋がる、意味ある学習）、②構成主義的な整合性（授業内容/デザインと評価が学習目標と整合性がある）、③学習対象者とバリエーション、この3つの考え方があるとされている。このことを溝上・松下（2015）は著書の中で示しているが、講演の中で、そもそもALとはディープなものではないかと主張した。また、学びの積み重ねで生涯教育としてランジッドするものではないかと述べられた。

また、学習が促進する条件として、1.いろいろな他者によって解答にバリエーションがある（解答内容・思考の吟味）、2.自らの理解と他者の理解の間に葛藤や躊躇がある（そこで生じた疑問や感情が理解を進化する）、3.同レベルの他者の発言を鵜呑みにしないことを利用（批判的思考力）、4.自らの活動を振り返る（自身の状態を把握することの理解/メタ認知）、5.学習に一定の時間をかける（学習時間の確保）、6.解決すべき課題がある（学習への動機づけ/Project Learning）を明確にする必要があるとした。

さらに、DALを促すコツとして進められたことは、①内化と外化の連動、②メタ認知、③グルーピングについてであった。以下にその内容を記す。

【①内化と外化の連動】：ALは外化が重要であるが、最も重要なことは内化の質であるとし、わかったつもりをつくる予習先行型の学習のしくみをいかにつくるかが大切である。これにより、わかったつもりからわかったことへ、どのように導くかが重要である。内化しないと外化しないこととなり、内化と外化のバリエーションをいかにつくるかが鍵となる。学んでから教えるが一番よい教育であるという考えのもと、さらに、内化⇒外化⇒内化のプロセスを踏むことが学習者の学習促進につながると強調された。

【②メタ認知】：自然に考える自分と一段上から自分自身を監視する自身との認知を促すことを意

味する。自分の認知や行動をチェックするモニタリングの力と状況に合わせて認知や行動を修正するコントロールの力を把握し、このモニタリングとコントロールの2つの力を利用できるようにすることが重要である。

【③グルーピング】：グルーピングには2つのタイプ、収束モデル（コミュニケーションを取るという行為の中には合意の形が求められる。合意形成する上での理解の中では自ずと知識の抽象化・概念化が行われる）と多様性による統合モデル（協調学習者同士が解決しようとする問題は同じであるが、その過程において一人一人が理解することは異なったものになる）がある。いずれのグルーピングであっても、最後は個人の学びに落とし込む評価が必要である。

講義を受け、DALに学習者を近づけるには、学習者の立場に立ち、学習の前提条件をおさえること、講義の前に予習を進められるような十分なオリエンテーションと予習をするしくみのバリエーションをつくること、グループで学び、他者とのやりとりを通して感じ考える機会を増やし、学生の思考力が深められるような学習支援の在り方が重要であることを再実感した。高等教育機関で学ぶ学習者に主体的な学習を進化させるためには組織的な取り組みと各学部内でのネットワーク、教員の教育力が不可欠である。今回、研修で学んだ事をいかして、学生の学習の準備状態を的確におさえ、学習者の学習動機が高められるような内化⇒外化⇒内化を実施できるよう努めていきたい。

スキルアップ講座のワークショップは本学の山川修教授と仁愛女子短期大学の田中洋一教授が企画したもので、スタンフォード・デザインガイドに基づくものである。本学の山川修教授より、デザイン思考の概要についてミニレクチャー（30分）、その後、小グループ（グループメンバーは多様なメンバー構成）でのミニ・ワーク（90分）、各自のレビューとグループのレビュー（15分）を実施した。デザイン思考とは人間中心を原則としたイノベーションのための問題解決プロセスである。人間中心とは問題を解決する上でユーザのニーズを中心におくという意味であるが、ユーザが必ずしもニーズを理解しているわけではない。そのため、相手を観察し相手の感じていることに共感し、深い洞察力が必要な要素として求められる。また、ブレインストーミング的な発散的思考と収束的思考を直観と分析を行ったり来たりしながら思考する。今回は教育課題について各自、2度のインタビューを実施し、問題の掘り下げ、再設定、現状からみたギャップを踏まえたインサイトを推測し、プロトタイプと呼ばれる解決策を創造し、その過程を想起するという構成でミニ・ワークを体験した。想像の過程では、モビール・リボン・ビー玉等さまざまな教材を資源に表現する楽しさを体感した。このワークを通して発想力を豊かにすること瞬時に思考力を働かせることの重要性を学んだ。今後、学んだ事を教育・研究・組織員としての活動等に役立てたい。

（文責：澤田 敏子）

（2）FD 教育セミナー：研究指導に活かす「人を対象とする研究になぜ倫理審査が必要か」

日時：2015年9月1日（火）13:50～15:30

講師：土屋 貴志氏（大阪市立大学大学院文学研究科 人権問題研究センター兼任研究員、看護学研究科・文学研究科研究倫理審査委員）

会場：福井キャンパス共通講義棟 L113

主催：福井県立大学教育学習支援チーム

企画・世話人：看護福祉学部看護学科 有田 広美氏

「臨床研究に関する倫理指針」と「疫学研究に関する倫理指針」が統合され、新たに「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針」が2015年4月1日施行された。新指針を踏まえた研究教育や研究を実施するために、今回、看護福祉学部看護学科 有田広美教授が中心となって標記の教育セミナーを企画した。

新指針では研究機関、倫理審査委員、研究に関わる人（事務も含め）に対し、教育・研修を受けることを責務としている。このことを受け、多くの大学では試行錯誤しながら研究倫理教育を導入している。新指針を踏まえて研究者が研究倫理に基づいた研究を実施することは当然であり、しかも大学の教員は学部および研究科の研究教育にもそれを反映させなければならない。

今回のセミナーでは、教員26名、事務職員2名、大学院生10名、学部生10名の参加（表参照）があり、参加者にとって「人権」についての理解を深められた有意義なセミナーとなった。我々が当たり前のように使っている「人権」について、哲学の視点から、あらためて考えさせられ倫理教育の必要性を痛感した。

（文責：平井 一芳）

参加者の総数と内訳

学科	所属	人数
看護学科	教員	19
	大学院生	8
	学部生	10
社会福祉学科	教員	2
	大学院生	2
学教センター	教員	2
経営学科	教員	1
生物資源学科	教員	1
海洋生物資源学科	教員	1
事務局		2
計		48

2.4.4.2 社会福祉学科

2015年度 全国社会福祉教育セミナー参加報告

日時：平成27年10月31日（土）～11月1日（日）

場所：同志社大学今出川キャンパス

本学参加者：木村、吉川、奥西

研修内容：教育セミナー 全体テーマ「未来を担うソーシャルワークをめざして～いま、求められる社会福祉教育・実践を考える」

第1日目(10/31) 日本社会福祉教育学校連盟設立 60 周年特別企画 特別講演とパネルディスカッション

特別講演「Globalization and Social Work」

講師：国際ソーシャルワーク教育連盟(IASSW)前会長、香港理工大学副学長 Angelina Yuen 氏

パネルディスカッション「ソーシャルワーク専門職のグローバル定義・リージョン・ナショナル定義の制定と国際動向」

司会・講師紹介：日本社会福祉教育学校連盟 国際関係委員長、大阪市立大学教授 岡田進一氏

コーディネーター：日本社会福祉教育学校連盟副会長、同志社大学教授 黒木保博氏

パネリスト：国際ソーシャルワーク教育連盟(IASSW)前会長、香港理工大学副学長

Angelina Yuen 氏

アジア・太平洋ソーシャルワーク教育連盟(APASWE)前会長、淑徳大学アジア仏教社会福祉学術交流センター長 秋元樹氏

日本社会福祉教育学校連盟 国際関係副委員長、関西学院大学教授 大和三重氏

国際ソーシャルワーク教育連盟前副会長、香港理工大学副学長のアンジェリーナ・ユエン氏による「グローバル化とソーシャルワーク」をテーマとした講演。グローバル化は経済、社会、文化、環境、政治などの側面に影響を与え、社会的側面では、都市-農村格差、都市内格差、脆弱な社会集団の周縁化（女性、障害者、高齢者、少数民族、未熟練労働者等は低賃金労働に従事し、社会的に排除される）が顕在化しているコミュニティに参加し、社会変革をもたらし、地球市民として生きるための教育カリキュラム、異文化間実習、インフォーマルな教育カリキュラムなどの教育改革の必要性、都市部のスラム・農村に残されたこどもと高齢者などコミュニティを基盤としたソーシャルワークの開発が強調された。

パネルディスカッションでは、ソーシャルワーク専門職のグローバル定義を基盤に、アジア太平洋地区定義、各国定義をどう策定し、教育にどのように展開できるかという課題が指摘され、福祉国家の退潮の中でソーシャルワーク教育をどうするかという今回のセミナーの基本課題が提示された。（文責：吉川）

第1日目(10/31) 基調報告「いま、ソーシャルワーカーがなすべきことと次世代のソーシャルワーク教育を考える」

NPO 法人ほっとプラス代表理事 社会福祉士 藤田孝典 氏

藤田孝典氏の要旨。

大学での教育は、ミクロレベルの技術に傾倒しており、実習先においてはソーシャルワークを教えてもらえる環境になかった。実習先ではソーシャルワークの一部しか教えてもらえずに、なかには介護実習でお茶を濁しているところもあった。大学時代にホームレスへの巡回訪問等のフィールドワークの経験を通して、機能不全を起こしている社会福祉制度の現実、法律に位置付けられている人々しか対象としないソーシャルワークの実態を目の当たりにした。卒業後、生活困窮者支援活動のNPOを立ち上げて今日に至るが、社会構造に働きかけるソーシャルワークが求められている。拡大し続ける社会問題にソーシャルワーク、ひいては社会福祉教育はついていない。誰のために、誰を何のために社会福祉教育を提供するのか不明である。教える側は、本当にソーシャルワークの力や可能性を知って教えているのだろうか。ソーシャルアクションができる社会福祉専門職の養成を期待したい。そろそろこのことをやらないとソーシャルワーカーの認知度も社会的地位もあがらないだろう。

シンポジウム コーディネーター：同志社大学教授 空閑浩人 氏

シンポジスト：白鷺病院医療福祉科 MSW 藤田 譲 氏、

立命館大学教授 岡田まり 氏

コメンテーター：藤田孝典 氏

藤田譲氏の要旨。発題「多職種連携、利用者支援の立場から」

実習生や新人のMSWの中には、ソーシャルワークを知らない専門職がいる。専門知識、技術はもとより、深刻なことは、知らない、出来ないことへの誤った対処であり、専門職としての使命感、責任感の乏しさである。このような未熟なソーシャルワーカーが輩出される要因として、養成課程のカリキュラム、あるいは、養成課程進学前の教育内容と何らかの関係があるのだろうか。いま、ソーシャルワーカーがなすべきこととは、実践力をとことん向上させることである。次世代のソーシャルワーク教育の責務とは、ソーシャルワーカーの実践力を育むための教育を行うことである。実践力をいかに育むか。①必要な知識を身につける機会を増やす。②技術を身につける機会を増やす。③チームプレーを体験的に学ぶ。④使命感を涵養する。⑤人の尊厳を学び、考える機会を持つ。⑥ ①から⑤が学べるカリキュラム・教育プログラムを作る。⑦ ①から⑤を教授・指導できる人材を養成する、ことである。いかに教えるかこそ今最も重要なソーシャルワーク教育の課題である。教育の場でも様々な試みが行われていると思うが、そこから導かれるエビデンス、実践者間とのコンセンサスはない。

岡田まり教授の要旨。発題「ソーシャルワークを担う次世代育成・教育の立場から」

社会福祉を取り巻く状況は大きく変化している。福祉ニーズの拡大と多様化がもたらされ、様々な制度改革が進行している。新しいソーシャルワークのグローバル定義に見られるように、ソーシャルワークにおける社会変革、社会開発、人々のエンパワメントと解放を促進する機能が求められている。現在のソーシャルワーカーの課題として、①社会変革や社会開発につながることをしているか。②社会的結束につながることをしているか。③人々のエンパワメントや解放につながることをしているか。④社会正義を推進、維持しているか。⑤人権を尊重しているか。⑥集団的責任を自覚し、果たすように取り組んでいるか。⑦多様性を尊重しているか。⑧生活課題に取り組み、ウェルビーイングを高めるよう人々と構造に働きかけているか。⑨ソーシャルワークの理論などさまざまな知識をソーシャルワーク実践に活用しているか、があげられる。これらの課題にいかに気づいていくか、取り組んでいくか。課題状況を正確に認識（アセスメント）し、目標を立て計画し、モニタリング、評価していくPDCAサイクルが重要である。望ましい方向に状況を変えていくための戦略として、変化のプロセス、変化のステージを考慮することが必要である。ソーシャルワーク教育のこれからの課題として、①専門職の価値、倫理に基づく実践を目指した教育。②形式知から実践知への転換。③根拠に基づく実践教育。④福祉現場と教育現場の連携・協働。⑤養成教育から現任訓練・研修への継続。⑥生涯学習・自己研鑽・専門職文化の醸成。⑦ソーシャルワークについての社会的認知度。⑧職能団体への参画、職能団体を通してのアクション。⑨教員のFDとサポート、があげられる。

コメンテーター藤田孝典氏の要旨。

当法人では、年間約300件の相談を受けている。それぞれのケースに対するソーシャルアクションの方法は多様である。実習教育においてマクロレベルのソーシャルワーク実習を期待する。社会変革を必要とする具体的事例から実習項目に落とししていくのがいいだろう。また、ミクロとメゾ・マクロを関連付けることも忘れてはならない。学び続けることがソーシャルワーカーの旅である。

コーディネーター空閑浩人教授の要旨。

今日の社会状況の中でソーシャルワークは機能するべきである。生活問題を抱える人の背景に社会構造的問題が必ずある。地域や社会環境に働きかけること、すなわちミクロからメゾ、マクロレベルに至るダイナミックな創造性に富んだ「広がり」と「深さ」を意識したソーシャルワーク教育を展開していくことが重要である。（文責：奥西）

第1日目（10/31）

第1分科会テーマ「ソーシャルアクション・社会変革と社会福祉教育」

コーディネーター：同志社大学教授 小山隆氏

報告者：NPO 法人ほっとプラス代表理事、社会福祉士 藤田孝典氏

NPO 法人 Social Change Agency 代表、社会福祉士 横山北斗氏

分科会では、生活困窮者支援活動を行う NPO 代表とソーシャルアクションを起こすためのネットワーク作りを目指す NPO 代表の2人によるプレゼンテーションの後討議が行われた。既存の枠組みにあてはめるだけでは解決できないニーズを抱えた人々を支援するには、このまま法律や制度に該当する対象者を選別し続けた支援を行うのか、ソーシャルアクションをどう教えるか、教育カリキュラムの抜本的な見直しが必要ではないか、などの指摘があった。

学部・大学院学生の参加者が多く、2人の実践への意見・質問が多くあり、研究・教育に関する議論に至らなかった（文責：吉川）

第2分科会テーマ「ソーシャルワーク実践と社会福祉教育～実習演習教育を中心に」

コーディネーター：松山大学教授、日本社会福祉士養成校協会常務理事 中谷陽明氏

発題者：立命館大学教授 岡田まり氏、東京国際大学准教授 村井美紀氏

2007（平成19）年に改正された社会福祉士及び介護福祉士法の付帯決議により、施行後5年を目途に新カリキュラムを見直すことが規定されている。コーディネーターの中谷氏より2018（平成30）年度カリキュラム改正の予定であるが、本年9月17日に厚生労働省・新たな福祉サービスのシステム等のあり方検討プロジェクトチームによって公表された「誰もが支え合う地域の構築に向けた福祉サービスの実現—新たな時代に対応した福祉の提供ビジョン—」をどの程度カリキュラム改正に反映させるかという点で改正時期および内容は不確定であることが説明された。

そして、平成25年に社養協が実施した新カリ実態調査の最終報告書データを基に、教員講習会受講の教員の中には、実務経験なく修士課程修了後すぐに実習指導を担当する教員や社会福祉学以外の専門分野の教員が約3割居ること、演習・実習担当教員の実践現場でのスーパービジョン担当経験がない、あるいは5年未満である教員が半数以上を占めることを取り上げ、演習・実習担当教員の指導力向上の必要性が示された。

次に、岡田氏より「演習教育を中心に」という発題がなされ、「演習教育はソーシャルワークにおけるメゾレベルの実践である」と演習担当教員が認識し、倫理・価値、根拠に基づく教育実践を行い、理論・モデル、教育理論等に基づく方法を応用する必要があるという意見が述べられた。

最後に村井氏からの「実習教育を中心に」という発題より、新カリキュラムでは実習前と実習後に相談援助演習を配置し、実習体験前後の理解の結び付けをめざすことを評価しながらも、教員のスーパービジョン能力が問われていることの指摘と現行の180時間という実習時間では学習内容に限界があるため、国試合格後に第二次実習を設定し、現行の第三段階（SW実習）に相当する内容を実施することが提案された。（文責：木村）

第3分科会テーマ「高等教育機関と社会福祉教育～大学・大学院におけるSW教育を中心に」

コーディネーター：日本社会事業大学教授 大橋巖 氏

発題者：首都大学東京教授 和気純子 氏、日本福祉大学教授 野口定久氏

和気純子教授の要旨。「学術会議の参照基準を中心に」2015年6月19日日本学術会議社会学委員会社会福祉分野の参照基準（平成27年6月19日）に関して、参照基準が求められる背景として、大学設置の規制緩和、学生の進路の多様化、曖昧な学士力への反省がある。参照基準とは、各大学が学士課程で学生が身につけるべき学習成果を具体化・明確化するものであり、そのために学問分野毎の学びの本質的意義がすべての大学に共有されていることが前提になる。学術会議が分野毎に「教育課程編成上の参照基準」を策定し、各大学が個別の教育課程を編成する上で参照できる、最低限共有する各分野の学びの本質的意義を示すものである。参照基準はコアカリではない。すべての学生が基本的に身につけるべきことを同定し、「教育課程編成上の参照基準」として各大学に提供するものである。参照基準の構成（各分野共通）は、①学問分野の定義、②学問分野に固有の特性、③学問分野を学ぶすべての学生が身に付けることを目指すべき基本的な素養、④学習方法及び学習成果の評価方法に関する基本的な考え方、⑤市民性の涵養をめぐる専門教育と教養教育との関わり、である。参照基準からみる社会福祉学教育の課題としては、①参照基準、コアカリキュラム、社会福祉士養成カリキュラムの関係性、②社会福祉学、社会福祉、ソーシャルワーク、相談援助の定義の多様性、③社会福祉学原論、国際福祉の欠落、④社会福祉学教育の学際化、多様化とユニバーサルリズム、⑤グローバル化～重層的定義の確立に向けて（「ソーシャルワーク専門職のグローバル定義」IASSW, IFSW, 2014 及び、「ソーシャルワークの教育および養成のためのグローバル基準」IASSW, IFSW, 2004）、⑥参照基準と認証評価、⑦「参照基準」が問いかけるもの、等があげられる。

野口定久教授の要旨。「社会福祉系大学院の改革課題とSW教育のあり方」

社会福祉系大学院が置かれている現状として、①社会福祉ニーズの増大とその深刻化に対する高度な力量を有する専門職養成の期待、②社会福祉系大学院の形態の多様化（社会人対象の夜間開講、通信教育等）、③伝統的な社会福祉学専攻の定員確保の難しさ、④学部進学者の減少、実践者の社会人入学、他の学問分野からの流入、定年後のシニア層、東アジアからの留学生など、入学者の多様化、⑤グローバル視点を備えた研究者および高度専門職業人の養成、海外の大学院・研究機関との教育連携プログラムの開発の必要性等があげられる、

社会福祉系大学院の改革課題として、専門職養成に比重を置いた研究科の検討課題は、①社会人実務者のニーズに応じた研修コンテンツ（スーパービジョン、権利擁護、ケアの質等）のプログラムの推進・開発、②医療・福祉分野における社会人リカレント事業の開発、③認定（上級）社会福祉士への対応、④産学官協働による研修体制の推進等。当面の研究教育方法の改善課題としては、①行政や社会福祉法人、事業所の入試枠を拡大し、オンデマンド等のeラーニング方式の共同開発の推進、②行政や法人の運営管理、経営領域およびカリキュラムの拡大、③社会人（シニア）層、特に団塊世代の学習意欲への対応、④専門職連携教育（Inter professional education）、⑤福祉プログラム評価や根拠にもとづく実践（Evidence-Based Practices）等。

教育の実施体制および質の向上では、①研究方法論および調査研究方法論等、コア科目の配置、

②履修モデルの体系の提示、③シラバスの項目を統一し、きめ細かな教育の実施、④社会人院生および留学生が受講しやすい時間割の改編、⑤授業アンケートの実施、⑥研究倫理規定および倫理委員会の設置等があげられる。

社会福祉系大学院のソーシャルワーク教育への期待としては、①ソーシャルケア・サービスというコンセプトを重視した教育プログラム（ソーシャルサポートネットワーク、チームアプローチ、コミュニティソーシャルワーク）、②認知症ケア、ターミナルケアにおけるソーシャルワーク実践、③スーパービジョン・多職種連携と「実践知」教育があげられる。（文責：奥西）

第2日目（11/1）特別講演「私たちが未来を変える～アクションを起こす原動力」

講師：NP0 法人「8bitNews」代表 堀潤氏

元 NHK アナウンサーというキャリアをもつ堀氏が、2013 年に設立した NP0 法人において行っている、様々な情報発信ツールを使った報道や社会活動とクラウドファンディングのサポート事業と情報発信者のスキルアップ・ワークショップ事業の実例を通して、ソーシャルアクションを世界に発信することの意味と学生への指導に取り入れるべき視点についての講演内容であった。インターネット環境により、ある問題を知らない人への発信が支援につながり、情報発信により解決への知恵が世界から得られることがあるという利点や、「先進国であるのにこのような社会問題がある」という視点で海外は日本に注目していることについて解説され、質疑応答では、学生に対する SNS 使用に関する指導において「受信者ではなく発信者である」ことを強調すべきであることが述べられた。講演の骨子から、教員も学生も「社会を変える当事者であること」を意識することの重要性を理解できた。（文責：木村）

緊急企画『『新たな時代に対応した福祉の提供ビジョン』の公表（9/17 付厚生労働省）と求められる社会福祉士養成教育～社会福祉士養成カリキュラムの見直しに向けて～』

話題提供者：厚生労働省社会・援護局地域福祉課生活困窮者自立支援室長 本後健氏

発題者：日本社会福祉学校連盟会長、日本福祉大学学長 二木立氏

日本社会福祉士養成校協会副会長、同志社大学教授 上野谷加代子氏

まず厚生労働省社会・援護局福祉基盤課社会福祉専門官である松下能万氏の代理として、本省氏よりプロジェクトチーム組織と全世代・全対象型のビジョンが必要とされる背景について解説がなされた。

次に二木氏より、一定の評価をしつつも、プロジェクトチームが厚労省職員のみで構成され、研究者等が含まれていないことや、障害者福祉についての記述がきわめて弱い点に関する意見が述べられた。また「精神保健福祉士」についての記述がないこととコーディネーター人材としての「社会福祉士」と表現され、ソーシャルワークについて言及されず、「福祉人材確保検討対策検討会における議論の取りまとめ（2014 年 10 月）」においても「介護人材」確保に関する検討・提言が大半であったことを問題視し、危機意識についての私見について解説があった。そして、福祉教育関係 3 団体は 1 年半後の統合を待たずに、ソ教連（日本ソーシャルワーク教育団体連絡協議会）として、速やかに「ビジョン」も含んだ社会福祉・社会福祉士制度の改革についての検討と意見集約・提案に取り組む必要性和そのための「特別委員会」設置を急ぐ方針であることが述べられた。

そして、上野谷氏からはビジョンで示された「分野横断的に福祉サービスが提供できる人材」「包括的コーディネートを行う人材」を現行の課程の年限で養成できるのかという疑問と、養成カリキュラムや教育体制、社会福祉士国家試験科目区分及び指定科目の抜本的な見直しが必要となることに関する意見が述べられた。

最後にフロアからもビジョンに対応する人材確保方針の具体化が望まれることと、今後の福祉人材確保検討対策検討会には、社会福祉士と精神保健福祉士をメンバーに入れるよう要望があがった。（文責：木村）

学科FD研修会

社会福祉教育のあり方については、介護福祉士・社会福祉士、精神保健福祉士等の国家資格に関連する養成教育に関する議論の他にも、「学士課程教育の構築に向けて（2008年中教審）」「社会福祉専門職養成コア・カリキュラム（2013年日本社会福祉教育学校連盟）」「ソーシャルワークのグローバル定義（2014年国際ソーシャルワーカー連盟）」「大学教育の分野別質保証のための教育課程編成上の参照基準（2015年日本学術会議）」等を視野に入れた幅広い視点からの検討が求められている。

今回は、「ソーシャルワークのグローバル定義」の理解を深めることを中心に、上記の答申等も参照しながら、今後の社会福祉教育のあり方について考える機会とした。

日時：3月8日（火） 4・5限（14:40～17:50） N354 教室

内容： 講義「ソーシャルワークのグローバル定義とソーシャルワーク教育」

演習「カリキュラム・マップ」を作成しよう

参加者：11名

2.4.5 授業改善についての課題と展望について

2.4.5.1 看護学科

看護教育には臨地実習が課せられており学生は看護実践能力向上をめざして臨地実習に取り組んでいる。しかし、学生は無資格者であるが、学生の行為が対象者には看護にならなくてはいけないので、教員の教育的支援が必要になる。そのためには、理論と実践に基づいたキメの細かい教員の実習指導能力の維持・向上が必須条件である。これらを踏まえ、各領域の教員は相互で意見交換やグループワークを行いながら看護教育における授業改善に向けての取り組みが必要であると考えます。

2.4.5.2 社会福祉学科

社会福祉学科のカリキュラムのなかには、社会福祉士ならびに精神保健福祉士の国家試験受験資格を取得するための指定科目が配置されていて、受験資格取得のために実習、実習指導等の科目を履修する学生が多くいる。学生は実習で様々な現実と出会い、考え、悩む中で自分の今後の専門職としての姿を創りだしていく。学生一人ひとりが自分の課題に気づき、それらと向き合い解決に向かっていくために一人ひとりの学生にマッチした環境を教育の中で整えていくことが必要と思われる。学生が今何を必要とし、何を学ぶべきなのかを教員のサポートと一緒に具体的な経験の中で探し、学びを深めていく環境である。講義、演習、実習の各科目の関連性について、それをどのように捉え、意味づけし、関連づけていくかということについて教員間で十分な相互理解・コンセンサスを得るまでにはいたっていない部分があり、学生の学びを深めるための環境

づくりという点でも、学科FD活動の大きな課題であると考えている。

また、近年実習を履修しないで卒業を迎え、社会福祉領域以外への進路を選択する学生も少なからずいる。その学生についても卒業後の進路を見通しながら学士力に相当する基本的な知識・技術、技能を深め、社会福祉学科での学修に興味を持って取り組むことができるような気持ちを引き出すことが求められている。

学生の中には、外見の表情では捉えられない、周りに対して非常に敏感になって、感情が揺れてストレスを抱える学生もいる。教育の中で学生自身が「聴く力」「考える力」「悩む力」「自己理解力と自己肯定力」「課題解決力」等を学びながら、学生生活をより充実させたものにするための工夫を検討していきたい。

2.5 学術教養センター（津村文彦、山川修、北村知之）

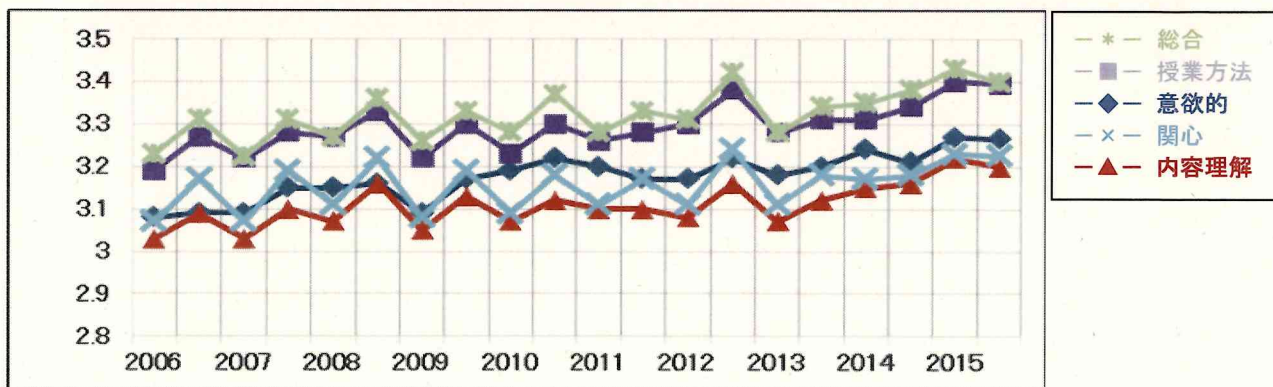
2.5.1 授業評価アンケートの結果

2015年度の数値は、前年度と比べて、総合評価・授業方法・意欲的受講・関心・内容理解の全項目において上昇している。2013年度から2014年度にかけても同様の上昇が見られた。昨年度の報告においても記されているとおり、これらの数値の変化は、前年度との比較をもって「一喜一憂するような性格のデータではない」が、下掲のグラフに見られるように、前後期を併せて過去10年のスパンでその変化を見ると、上下動を繰り返しながら全体的には緩やかに上昇を続けていることが見てとれる。数値にすれば、各項目において0.2ポイント程度の上昇であるが、この数値は百分率にして5ポイント以上の上昇である。

数値の変化をもたらした具体的要因については個別の科目についての立ち入った分析も必要であろうが、この10年間、各教員が部局の各種FD活動と関わりながらそれぞれに授業改善を試みてきたことはこれまでの報告書にも記録として残されているとおりであり、まずは、その成果がこのような形で現れていると評価してもよいと思われる。今後もこの趨勢が続くことを期待したい。

なお前後期の数値変化に着目してグラフを見ると、ほとんど全ての年度において後期の数値が前期の数値を上回り、翌年の前期は下落するということを繰り返しながら（つまりジグザグを描きながら）、全体的には少しずつ上昇してゆくというパターンが長らく続いていたが、ここ3年間はそのジグザグ・パターンに変化が現れ、前後期の差が小さくなり、翌年前期も前年後期を上回るというパターンが見られるようになった。そして今年度は全項目について後期の数値の方が低いというこれまでになかった現象が起こったことにも注意しておきたい。

一般教育	2006		2007		2008		2009		2010		2011		2012		2013		2014		2015	
	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期
総合評価	3.23	3.31	3.22	3.31	3.27	3.36	3.26	3.33	3.28	3.37	3.28	3.33	3.31	3.42	3.28	3.34	3.35	3.38	3.43	3.40
授業方法	3.19	3.27	3.22	3.28	3.27	3.33	3.22	3.3	3.23	3.3	3.26	3.28	3.3	3.38	3.28	3.31	3.31	3.34	3.4	3.39
意欲的	3.08	3.09	3.09	3.15	3.15	3.16	3.09	3.17	3.19	3.22	3.2	3.17	3.17	3.22	3.18	3.2	3.24	3.21	3.27	3.26
関心	3.07	3.17	3.07	3.19	3.11	3.22	3.08	3.19	3.09	3.18	3.11	3.17	3.11	3.24	3.11	3.18	3.17	3.18	3.23	3.23
内容理解	3.03	3.09	3.03	3.1	3.07	3.16	3.05	3.13	3.07	3.12	3.1	3.1	3.08	3.16	3.07	3.12	3.15	3.16	3.22	3.20



2.5.2 授業公開の方針と実績

学術教養センターでは、授業を常時公開としているが、FD開始の頃に比べると、授業

参観の実践は少なくなった。以下報告を挙げる。

科目：「地域特講 A（匠と現代）」

担当教員：杉村和彦・増田頼保

日時：10 月 1 日から 2 回を除き毎回参加（金曜日 5 限）

教室：L107

参観者：松本涼

第 7 回の講義「匠の文化論—ヨーロッパ」を担当することになり、全体としてどのような授業なのかを把握するために都合が付くかぎり参観した。毎回福井の職人を招き、和紙・漆器などの伝統工芸から、ウェアラブルコンピュータ・風力発電などの最先端技術までを解説する講義は興味深く、とくに他県出身者には見えにくい福井の特性を理解することにも役立った。受講学生数は少なかったが、紙漉き体験の課外授業においても主体的に作品作りに取り組んでいた。座学だけでなく、実際に工芸品にふれたり、作品を作ったりすることが学生の講義への関心を高めることを実感した。

他方で、職人の方々と学生とは年が離れていることが多かったので、直接の対話が難しい様子も見受けられた。その間をつなぐ工夫があれば（あらかじめ質問を募集しておく、ディスカッションで TA のような役をおくなど）、受講生はより授業の価値を実感できたのではないだろうか。

科目：「比較文化論」

担当教員：津村文彦

日時：1 月 8 日（金）3 限

教室：L110

参観者：北村知之

大講義室における授業で、出席学生は 108 名。

配布されたレジュメは A 4 で 8 ページ、パワーポイントのスライドを用いての授業である。レジュメ前半は学生からのコメントをまとめたもの、後半は主題についての民俗学概論である。後者には記入用の空欄が空けてある。

この回の主題は「大晦日と正月の食事」である。事前に学生は年末年始の食事についてのレポートをネット経由で提出しており、授業前半はそうした学生からの写真やコメントを紹介し、後半は同主題についての民俗学的な知見を紹介するものであった。

年越しソバや雑煮という主題の身近さもさることながら、学生たちは自分たちが提出した写真やコメントが素材となっているということもあって、授業への集中度は全体的に高いように見えた。とりわけ授業前半は教室全体が授業に集中していた。しかし後半になると集中力が落ちたのか、スマホをいじったり、小声で私語をしたり、あるいは眠りに落ちる学生達が出てきた。教室内でのその分布を見ると、通路を挟んで教室前半分に着席した 51 名の学生の内、集中力を失ったように見えたのが僅か 5 名であるのに対して、通路より後ろの 57 名については、33 名がスマホをいじったり眠ったりという形で授業から脱落していった。

100 名を超える授業において教室内の集中力を最後まで維持することは困難なことである。1 コマ目から授業に出ている学生も多く、何コマも連続して 90 分間、着席したまま集中

して話を聞くことが身体的に難しいということは誰もが自分の経験を振り返れば解ることである。この授業は内容も興味深く提示法もよく工夫された優れたものであったが、それでも上記程度の学生は途中から関心を逸らせてゆく。あらためて大講義の難しさを認識した。

教員は授業に先だって、学生からの画像データをスライドに整理し、彼らのコメントをレジュメに取り込んでいたわけだが、その準備には相当の時間を要したものと想像され、参観者には良い刺激となった。

科目：「神話学」

担当教員：松本涼

日時：1月25日(月)4限

教室：L107

参観者：北村知之・津村文彦

大講義室における授業で、出席学生は40名弱。

A4で2ページのレジュメを配布、パワーポイントのスライドを使つての授業進行。途中、ブルーレイの映像も援用。

「ファンタジーの源流：ロマン主義から現代日本へ」と題されたこの回の授業は、北欧神話への注目が近代ドイツにおけるロマン主義を背景としていたということを具体的な史実によつてたどり、さらにその継承者としてトールキンを紹介し、最後に北欧神話の日本への影響を論じるものであった。

画像資料がふんだんに取り込まれたスライドを映写しながら授業であり、1回分の授業として起承転結のあるよく準備されたものであった。また講義で取り上げた神話を取り入れられたゲームなども紹介し、学生に身近な関心事への目配りも見られた。

参考資料なども紹介されており、講義内容に関心のある学生にとっては、面白く且つ学ぶことの多い授業であったにちがいない。授業の進行速度や話し方も適切であり、学ぶべきことの多い工夫された授業であった。

学生の授業への集中については、授業後半になると、意識が授業から逸れたり、寝落ちする学生が出てくる。そのような学生の教室内での分布は「比較文化論」の場合とほぼ同じであった。いずれの講義も世界を理解するために非常に役に立つ授業であるのに、もったいないことだと思つた次第。

2.5.3 部局内FD研修

①第6回FD合宿研修会

日時：2015年9月9日(水)～10日(木)

場所：仁愛女子短期大学

学術教養センターからの参加者：徳野淳子・松本涼・山川修・北村知之

前年度の研修会は会場が本学であり、センターからの出席者は6名であったが、今回は4名に減つた。2日間終日という研修時間の問題もあり、参加の敷居が高いのかもしれない。

9日：

セッション1

講演「ディープ・アクティブラーニングの実現に向けて」森朋子(関西大学)

セッション2

分科会1：授業現場におけるモチベーションクライシスの実態

コーディネータ：杉原一臣(福井工業大学)

分科会2：ラーニングポートフォリオの設計と評価-学習成果の可視化に向けて-

コーディネータ：田中洋一(仁愛女子短大)

分科会3：新しい授業方法に向けての“反転授業”

コーディネータ：長水壽寛(福井高専)

10日

セッション3：スキルアップ講座「デザイン思考ワークショップ（ミニ）」

講師：山川修（福井県立大学）田中洋一（仁愛女子短大）

②学術教養センター懇談会

日時：2016年2月3日（水）16:20～18:20

参加者：北村知之（報告者）・加藤まどか・亀田勝見・熊谷正・黒田祐二・杉村和彦・塚原典夫・徳野淳子・長岡亜生・浜本隆三・松本涼・山川修（12名）

学教センターでは次年度よりセンター教員によるオムニバス形式の講義「研究の世界」を新規に開講する。これは学生たちに大学における多様な研究の世界を紹介すると共に本学における一般教育への関心を喚起するための講義である。この講義を成功に導くために、過去われわれが行ったオムニバス講義「日本の文化と社会」をとりあげ、主としてその成績評価方法について意見交換を行った。またこれに続いて、本学学生の学力の推移について、過去7年間の英語クラス分け試験の点数変化についてのデータを紹介し、学生の現況について理解を深めた。

オムニバス講義の成績評価については、各教員が学生を10点満点で評価をした上で、それを踏まえて最終的評点をつけるのであるが、ここで問題にしたのは、採点状況が教員によって様々であるということである。平均点がきわめて高い教員もいれば、そうでない教員もいる。分布についても正規分布もあれば、偏りの大きい分布もあった。グラフに示された事例を見ながら、活発な意見が交わされた。参加教員は、課題レポートや授業のタイプもしくは性質によって採点のあり方が変わりうるということ、また教員によって授業や講義の位置づけが異なるということを再認識したものと思われる。従来あまり主題化されることのなかったこうしたテーマについて教員相互に異なる視点や考え方を示しあったことはきわめて有意義であった。

また学生の英語力については、国際化を謳い英語教育に力を入れてきた本学の方針とうらはらな困難な現場の状況についての認識を参加者が共有したことによって、今後、全体的にも個別的にもより適切な対策がなされるものと期待したい。

2.5.4 授業改善についての課題と展望

各教員の授業改善に向けての工夫・取り組みと課題・展望を報告する（五十音順）。

石原一成

講義・実技を問わず、受講生は学習活動の記録を行う。

それに対して教員がコメント・アドバイス等を記入しフィードバックを行い、双方向授業の基礎づくりを行っている。

また、大学による授業アンケートとは別に、下記の調査を行い、授業改善のための資料としている。3点の調査項目はいずれも自身の授業のねらいとするものである。

- ・自己管理に資する基礎的な知識の習得や態度の育成
- ・他者とのコミュニケーションを通じて、リーダーシップの発揮、問題解決等の能力
- ・就業力（信頼関係構築力や共同行動力など）の育成につながるスキルの獲得

大武 博

（担当科目：英語Ⅰ・Ⅱ・特論）

インターネット等を利用して、生きた英語素材を教材として利用することで、学生の興味・関心を喚起している。また、必修科目英語Ⅰでは、受講学生の専攻分野に近い領域の素材を利用することで、学術目的に叶った英語力を涵養することにも配慮している。

亀田勝見

〈中国語〉

三年目に入り恒例となりつつある留学生との交流授業についてだが、本年度は時間割の関係で参加してくれる留学生が少なく、1人に多人数がついて進める形となってしまった。このため、双方から一定の好評価をしてもらえたが、人数不足故の不満点も出てしまった。来年度は、学期はじめに協力をお願いをして人数を把握し、より多くの留学生を迎えて進めていきたい。

今年度はLCAP（中国語短期語学留学）が実施され、3名の学生が台湾の高雄へ二週間行った。成果は上々で、うち少なくとも2名は長期留学へつなげたいという希望を持つようになり、既に1名は2月から台湾へ1年の留学に赴いた。来年度も同じ高雄へ3名が留学することになった。今年度のプログラムの成果を踏まえ、よりよいものに進めていきたい。

授業の方針や手法については例年どおりである。次年度も、いかに復習を習慣づけるかに留意し、小テストや課題の与え方を工夫するとともに、発音のみならず、ピンイン表記修得のためのさらなる工夫を考えていく。

〈導入ゼミ〉

導入教育的要素の修得については、昨年度と同様の効果を得ることができ、学生のスキル向上はある程度達成できた。しかし、これも昨年度と同様、積極的な学問的活動につなげるところまではいかなかった。正直なところ、ゼミにおける指導方法の工夫によって改善できるのかは不透明であるが、まだ自分自身の指導に改善の余地があるので、今後も学生達の積極的な活動を促す道を模索していきたい。

〈学術ゼミ〉

今年度は、従来の漢文資料を継続して読み進めていくことに加え、海外研修をも取り入れ

た授業を試みた。事前に基礎知識としての漢文訓読と研修地を訪問するための予備知識を教え、事後は研修で取材した内容を元に、写真を多く取り入れた成果報告書を作成した。結果としては大成功だったのだが、授業形態ゆえの必然として、単年度で学生が入れ替わってしまうため、従来のような数年にわたる指導ができないという問題が新たに生じている。また、後期から参加した数名の学生は、独自の課題を出して対応したとはいえ、やはり置いてけぼりとならざるをえない面があった。来年度も同様の形式で進めるつもりなので、今年度の反省を踏まえてよりよい活動にしていきたい。

〈講義科目〉

古代中国（前漢～新王朝）における思想史を扱った。正直なところ、学生の興味を引きつけやすい材料に乏しい地味な時代の話であるが、できるだけ歴史的な展開との間の連動性、必然性を示した上で、各時期の思想的トピックを話そうと考えた。

上記の目的を実現するため、視覚的かつアニメーションをまじえたプレゼンファイルの作成、動画の編集などに多大な時間を費やしてしまった。来年度は次の時代を同様に講義する予定だが、健康を損ねないように、授業準備をよりコンパクトにする工夫をせねばならない。

北村知之

〈導入ゼミ〉

サブ・タイトルは「ヨーロッパ旅行計画」である。多くの学生が興味を持つと思われるタイトルであり、実際、受講学生は皆が本ゼミを第一希望としていた。本ゼミ固有の内容はヨーロッパの地理・歴史・地域文化を対象とするものであるが、導入ゼミが全学必修の科目であり、学部や関心を問わず共通の訓練を通じて一般的な技術を身につけさせるものであるという認識に基づき、形式を重視した授業プログラムを組み立てている。ネットの検索、資料収集、図書目録の作成、図書レポートの作成、パワーポイントを使ったプレゼンの実践と質疑応答、レポート作成等を行った。サブ・タイトルから少し遊興的なイメージを描いた学生もいたかもしれないが、実際は勤勉さを求める課題や作業の多い授業であった。しかしほとんどの学生は真面目に課題をこなしてくれた。

課題としては、グループワークにおいて学生間に仕事量の偏りが発生するという問題がある。いわゆるフリーライダー問題であるが、これは評価に反映させるにしても、エフォートの差をできるだけ小さくする工夫は必要である。

〈教養ゼミ〉

ネット上にある映画に関する英文を教材として、読解訓練を行った。毎回 A4 で 1 枚の和訳を宿題とし、添削を行った。初回 15 名の出席者であったが、初回の説明と宿題を経た後、2 回目からは 11 名に減じた。この 11 名は以後最後まで課題をこなし続けた。少人数であるため、授業後半には学生個々の学力の問題点が見えて、個別の指導を行うことができるようになった。この授業に参加した学生のほとんどは、本学においては英語を得意とする学生たちであるが、英文の分析的読解という点では、まだまだ伸ばすべき余地があると思われた。2 年次以後も同様の訓練が望まれるところである。

〈学術ゼミ〉

学術ゼミに参加する学生たちは当該教員の授業にもっとも関心を持っている学生たちであり、講義などでは必要となる学生の関心を引きつけるためのあれこれの配慮なしでも授業の内容に入ることのできる学生たちである。学生としての一般的な向上心も士気も高い。主として日本文化に関するテキストを教材としながら、質疑応答を行った。時間割の5コマ目ということもあり、授業は2時間以上にわたることも度々であった。

課題としては、過去数年10人前後いた受講生が今年度は4名に減じたということが挙げられる。ゼミの受講希望者数は、毎年一定である必要はないにしても、講義等を通じて学生たちに本ゼミにおいてより深く学びたいという気持ちになってもらわなければ、学生は集まらない。講義科目やゼミ内容についてのさらなる改善を考えたい。

〈講義科目〉

記入式のプリントを配布し、パワーポイントでスライドを見せながら授業を進めている。

学生の集中力を維持するために、講義の中盤に5分程度の中休みを入れる。

毎回出席カードを兼ねたリアクションペーパーを配布するが、これは中休み時に学生に教室の前まで取りにこさせる。これは休憩時間に一度立ち上がって身体を動かしてもらうためであり、着席のままじっとしているよりはリフレッシュ効果が高まると考えてのことである。

リアクションペーパーには質問や意見などを書いてもらい、回答すべきことがあれば、翌週それに答えた。

木村小夜

〈講義科目〉

・いずれも中講義室規模の講義であった。講義に緊張感を持たせるため、最初のうちは指名発問を行ったが、授業の進度が遅れがちになるにつれて余裕がなくなり、一方的な授業となってしまった。無駄な説明を省き、適度に息抜きできる中休み（はやり歌の解釈等）を設け、しかも内容は一回ごとに完結させる、など、各回の授業構成に関して改良すべき点はなお多い。

・授業内容に即して二百字課題を数回課し、次回で紹介して授業に組み込む形を継続。取り上げるに値する興味深い回答が必ず幾つか見出せる。頻出する漢字の誤記、表現技法についても指摘した。

・板書事項は事前に十分吟味し、これをそのまま写してもある程度理解可能となるものに変更した。ここ数年間で前回分プリントを綴じて持ってこない学生が増えたため、今年度より、メールで欠席連絡を入れてきた学生にのみ前回分を配布することとした。主体的にノートを取る学生が減ってきており、プリントの既述部分と書き込み部分（板書事項）の匙加減を毎年更新中である。

〈導入ゼミ・教養ゼミ等〉

・大学という環境に慣れてもらうこと、肩の力を抜いて自由に考え話せる雰囲気作り、この二つをとりわけ導入ゼミでは重視した。開講時にアイスブレイクの手法をいくつか試み、昨年度と同様、効果を感じている。全員の議論参加を促すため、隣り合った2～3人で課題

をめぐってやりとりさせる自由時間を設けた。

- ・導入ゼミは基本的に個人発表に重点を置き、事前指導にかなり時間を割いた。時間と人数の関係でグループ発表とせざるを得ない教養ゼミは、希望する対象作品でマッチングを行った。

- ・導入ゼミでは、発表に対する相互評価（参加者による評価シート記入・提出）と発表者へのフィードバック（無記名に作り直して渡す）を継続。

- ・調べて書くレポート形式の指導（注・引用方法・文献明記等）をした上で、最低一本は文献を引用して書くという条件をレポートに課した。学部・分野を越えて初めて書くレポートとして適切な課題とは何か、引き続き模索する必要がある。

- ・教養ゼミ・学術ゼミは主体的に参加する学生が多く、議論は彼らのペースで進む。そこで教員としては、発言しない（少数の）学生側にむしろ配慮すべきだが、一方で議論のレベルの引き上げも促さねばならず、双方への対応に一層の工夫を要する。

熊谷正

自らの講義を行うに当たって、どのような工夫をしているか、と言う事であるが、私の経験から言わせて頂くなら、若い学生達は、『生もの』であって、彼らに「このように、今日は、講義をしよう」と、年配のこちらが考えていっても、裏切られるだけである。いや、予定を立てれば立てるほど、その通りにはいかない。ゆえに、私は、前日の深夜に話す内容をじっくり考え、プリント製作をするだけで、あとは、「学生の流れ」に任せている。そういう意味では、私の講義は「学生主体」である。「工夫」と言うならば、講義の始まる30分前に講義室へ行き、「環境整備」を行って（＝いつも、目一杯、30分はかかる）、そうして、学生の様子、態度を窺い、その日の『ホントウの講義のやり方』を組み立てる。（これは、教歴31年の私にとっては、それ程難しい事ではない。）あと、一人一人の学生の言う事を、キチンと聞いてやること。自分の身だしなみ、等々――これらの事を学生達が予想以上に気にかけている事を、以前行っていた「授業アンケート」（毎時間、行った）で知っているの。

黒田祐二

〈講義科目〉

平易な言葉での説明、映像の使用、穴埋め式の講義ノートの作成と配布を行うことで、できる限りわかりやすくなるよう心がけた。また、ディスカッションとディベートを積極的に取り入れ、学生が自分で問題を考え解決できる機会を設けた。

反省と今後の課題としては、話す時のスピード、メリハリ、声のトーンなど、細かい所であるが重要と思われる点を工夫する、教職科目であるので学んだことが実践につながっていくように工夫する、ディスカッションやディベートを行った後しっかりふり返りをする、などを行っていきたい。

〈導入ゼミ〉

学生が問いや疑問を大事にしながら学習できるよう配慮した。また、グループワークを取り入れることで、学生同士のやりとりが増えるようにした。

反省と今後の課題としては、学生同士の交流をさらに増やす、クラスの雰囲気作りをする

など学生が授業に出たいと思えるような工夫を行う、情報量を極力少なくしながら着実に重要なスキルが身につくように工夫する、などを行っていきたい。

津村文彦

今年度も「学術ゼミ（地域研究）」（前期・後期）にて、昨年度に引き続き海外研修を交えた試みを行った。

前年度の後期に、翌年はどのような海外研修をやりたいか、経験を踏まえてゼミの学生とともに考えて、シラバスを作成していた。そこで、今年はカンボジア・アンコール遺跡群を目的地としながら、「ラーマヤナ物語に見られるインド文明の東南アジアでの受容」をテーマに掲げて、海外研修を行うこととした。出席者は昨年度から引き続いての受講が2名、新たに受講したのが2名（うち1名は台湾からの交換留学生）であった。

前期には、現代カンボジアの社会と文化、およびアンコール遺跡群にまつわる邦語文献を読むとともに、ラーマヤナ物語のタイ版であるラーマキエン物語を英語で読み続けた。それを通して、現代カンボジアについての基礎的な知識を習得するとともに、アンコール遺跡群の主だった遺跡の特徴、ラーマキエン物語の前半部のストーリーについても学んだ。

夏季には「ゼミ等海外活動支援補助金」制度を受けながら、8月31日より9月5日までの6日間の研修を、カンボジアおよびタイにて実施した。参加者は受講生全員の4名であった。航空券やホテルも昨年度に引き続き、学生主導で手配した。1人の学生が航空券の日付を誤り、1日早く帰国することになったのは残念であった。昨年も出発の日付を誤って1日早めていた学生がいたことを考えると、よほど注意を促さないかぎり、各自で手配のやり方はリスクが高いことを改めて感じた。

カンボジアでの研修は大きな問題もなく終了した。遺跡を訪問した際や、ラーマヤナ物語の影絵芝居を見たときなどは、学生たちも事前学習の成果を強く実感することができたようで、今回の目的の大きな部分は果たせたと感じている。またタイでは知人の働く工場を見学させてもらうこともでき、学生にとってはインターンシップ的な側面も作ることができたのは、大きな収穫であった。

事後学習としては、昨年度のように公開講座「ケンダイ・ワールド・ツアー」で発表することができなかったのは残念であったが、昨年度に引き続きフォトブックの形式での報告書は作成した。報告書は好評で、台湾の留学生は10冊も余分に購入していったほどである。

来年度以降、私はこうした試みを継続することはできないが、こうした活動の噂を聞きつけて、来年はこのゼミに参加したいという問い合わせを2件ほど受けていた。「ゼミ等海外活動支援補助金」なる制度もあるので、語学研修のみならず、学術ゼミなども使って、ぜひとも海外での学習機会を継続的に行ってもらいたい。

徳野淳子

2015年度は授業改善に向けて、書き込み式のサブノートを2種作成したことを成果として報告する。このサブノートは、これまで授業時に配布していたプリントをまとめ、講義回ごとに章分けしたもので、サブノートの作成により授業時の冒頭5分ほどかかっていたプリント配布の作業を省略するとともに、学生がプリントを紛失するということもなくなった。過日分の内容にも戻りながら講義をすすめることも可能になり、より講義をスムーズに

運営できるだけでなく、アクティブな授業展開が可能となった。

2016年度は、他講義においてもサブノートの作成を検討すると同時に、パワーポイントをより積極的に導入し、視覚素材を多用して理解の深化に努めていきたい。

長岡 亜生

〈英語Ⅰ〉

授業内容に関連した画像や動画などを提示し、テキストの理解を助けるとともに、学生の関心を高められるようにした。

基礎レベルの学生に対応するため、とくに基本的な文法事項について反復練習をおこない、また学生同士の活動、声を出す活動を充実させた。今後は、各学生のレベルに応じて、さらにきめ細かな指導ができるようにしていきたい。

〈英語Ⅱ〉

リーディングの授業では、既習事項の定着を図り、復習を徹底させるため、小テストを毎回課した。和訳をするのではなく、英文の概要をつかみ、配布した日本語訳例を参考に何度も英文を読むことで、読解力、速読力を育ませた。

リスニング中心の授業では、とくに発音練習に力を入れ、授業ではひとりでできないことを中心に、ペア、グループでの音読、暗唱を反復しておこなわせた。こうしたやり方は学生からも概ね好評なので、今後も改善しながら継続していきたい。

〈英語特論〉

LEAPケンブリッジ参加者のための授業では、現地での研修がスムーズにおこなわれるよう、英語読解力を鍛えるとともに、理解した内容をわかりやすく伝える練習、英語プレゼンテーションなどをおこなった。今後は学生が授業時間以外にもさらに主体的に学べるような仕組みを確立していきたい。

浜本 隆三

2015年度は授業改善に向けて、書き込み式のサブノートを2種作成したことを成果として報告する。このサブノートは、これまで授業時に配布していたプリントをまとめ、講義回ごとに章分けしたもので、サブノートの作成により授業時の冒頭5分ほどかかっていたプリント配布の作業を省略するとともに、学生がプリントを紛失するということもなくなった。過日分の内容にも戻りながら講義をすすめることも可能になり、より講義をスムーズに運営できるだけでなく、アクティブな授業展開が可能となった。

2016年度は、他講義においてもサブノートの作成を検討すると同時に、パワーポイントをより積極的に導入し、視覚素材を多用して理解の深化に努めていきたい。

松本 涼

〈講義科目：西洋史・神話学〉

・視聴覚資料の使用を継続。「神話学」はとくにアニメやゲームの例が多かったが、趣味が偏らないようにオペラや文学も採り入れたところ、これまで縁が無かったがオペラを観て

みたいという感想もあり、受講生の関心を広げることにはつながったと思われる。

・オムニバス授業「匠と現代」の担当回でおこなった、羊皮紙への筆写体験が好評だった。印象にも残るし、実際に体験することで講義の内容も理解しやすくなったと思われる。大人数で実施することは難しいが、講義内容を実際に体感するための工夫を増やしてゆきたい。

・「神話学」では、希望者のみにコメント付のレポート返却を行った（希望者は 5/110 名ほど。点数だけは LMS で全員に通知）。神話はマンガやゲームをとおして人気が高いが、全く知らないという人もいて、元から持っている関心の度合いによって受講態度が大きく異なっていた。その違いは自由論題のレポート内容にも反映されており、非常に独創的な分析から Wikipedia の丸写しまで差が大きかった。この点については対策を思案中だが、前年度から引き続き、講義科目では教員-学生の双方向のコミュニケーションや学生同士の相互作用の機会が少ないので、それを増やすことで授業に対する意欲を高めるという方法は来年度に試してみたい。

〈導入ゼミ・教養ゼミ〉

・論文形式の文章の読解では「問い」「答え」「論証」の構造分析を重視している。その上で、レポート作成の際に「問い」「答え」「論証」の形をつくるよう繰り返し指導すると、ただ自由にテーマを決めて書くよりも意識的に「問い」に答えようとするのがわかった。

（テーマ例：「魔女狩りについて」→「魔女狩りは現代にどのような影響を与えているか」）

・前年度は教員-学生の対話に終始し、学生同士の交流が少なかった点を省みて、今年度はグループワークを採り入れた。毎回クジ引きでグループを決めたことも、友達だけでなく色々な学生と話すことにつながり、学生同士のコミュニケーション促進には役立ったと思われる（クジは発表者・司会者決めにも使ったので、ゲーム要素もあり緊張をほぐすのにも有効だった）。「教養ゼミ」で最終レポートの作成をグループで行う学生が増えたのもその効果のひとつかもしれない。反面、やはりグループワークへの参加には個人の温度差がみられたので、どう改善するかが課題である。

森 英樹

山川 修

3. 点検と課題 (学術教養センター 北村 知之)

3.1 授業評価について

授業評価調査は、2004 年度に開始された。当初は回答選択式の質問項目が 18 もあるアンケートであった。この形式は 2009 年度まで続けられたが、質問項目の見直しがなされ、2010 年度からは質問数を 5 に減じたより簡便な形式に改められた。

各部局の授業評価アンケートの結果については、それぞれの報告ページにおいて詳しい分析がなされているので、そちらも参照されたい。ここでは部局別グラフおよび規模別グラフを比較し、その経年変化に注目しながらコメントする。

(1) クラス規模の比較

まず部局を問わないグラフ、すなわちクラス規模によって区分された二つのグラフを見ると、双方ともおおむね右肩上がりとなっており、授業評価は年と共に高まってきている様子が見てとれる。全学的な観点からは授業改善が進んでいると評価できる材料である。

100 人以下の教室は、100 人以上の教室に比べて、グラフ全体が 0.2 ポイントほど上方にシフトしており、少人数授業の方が一般的に授業評価は高くなるということが示されている。少人数の授業が好ましいということは自明とも言うべき共通了解であろうが、ここではそれが数値で確認できる。むろんこれは単に少人数であるから良いというのではなく、ゼミや実習のような双方向的な授業形態が学生の満足度を高めているものと思われる。

(2) 評価項目の序列

評価項目相互の上下関係については、過去 10 年間、全部局に共通して、ほぼ一定の序列が見られる。すなわち、1. 総合点、2. 授業方法、3. 意欲的取り組み、4. 関心の高まり、5. 内容理解という序列である。

このうち 1 と 2 の数値は多くの場合近接しており、また 3 と 4 も近接している。そして 5 はほぼ常に最下位に位置する。

2010 年度までの本欄で取りあげられた項目は、1 と 4 と 5 のみであり、グラフは 3 本の折線からなっていた。2008 年度の本欄では、1 が授業の質に関係し、5 は学生の学力に、4 は教師と学生の両者に関係すると解されており、「授業の質に関係する<総合評価>は高く、学力に関係する<内容理解>は低く、教師と学生の両者に関係する<関心が高まった>は、その中間にある」（2008 年度報告、p. 75）と評されていた。

2011 年度からは、2 と 3 が加わり、現在のように 5 本の折線グラフとなった。

2（方法）は 1（総合）以上に授業の質に関わるものである。現在の 5 本線グラフにおいて 1 と 2 の数値はきわめて近接しており、授業の質に関する評価は他の 3 項目に対して常に高いとすることができるだろう。次に、3（意欲）と 4（関心）はいずれも学力についてではなく、学生自身の姿勢についての評価として同系統の指標とみなしてよいであろう。そしてこの 2 本の折線も近接しており、併せて序列第 2 位のグループを成している。最後に、5（内容理解）は、学生自身の学力についての自己認識を示すものであり、ごく一部の例外を除いて、一貫して序列最下位の数値を示している。この「内容理解」に関しては、2010 年度の本欄でその低下傾向

が指摘され、2011 年、2012 年にはゆとり教育への言及などもあって、対策を講じるべき問題点とされている。その後の推移を見ると、内容理解は項目間の序列においてこそ常に最低ではあるものの、いずれの部局においても、当時(2012 年)の位置より見れば、2015 年に向けて右上がりのグラフを描いており、学生の授業理解についての改善が進んでいるものと思われる。

なお、この項目間の序列については、学生の意識のあり方を考えてみることも必要かもしれない。アンケートから窺うことのできる学生たちの意識は、授業を総合的に良いと評価し、授業方法も適切とみなしているが、自分たちの意欲と関心についてはそれほど高く評価しておらず、授業内容の理解についてはさらに低く評価しているというものである。つまり学生たちは、良い授業を受けているにもかかわらず、自分たちがそれ相応の内容理解をしていないと自己認識しているということであろう。逆に言えば、彼らは、自分たちが授業内容をよく理解できていないにもかかわらず、その授業を良いと評価しているのである。これは、彼らが自身の能力や学力について控えめであること、あるいは自己否定的であることを意味しているようにも思われる。これが本学の学生に固有の特徴であるのか、それともこの種のアンケートにおいては大学を問わず広く一般的に見られることなのか、これは他大学との比較を待たなければ判断できない問題である。

(3) 部局のゾーン

部局のグラフを比較してみる。各項目の数値を比較すると、部局によって分布のゾーンが異なることが見てとれる。最も高い位置に分布ゾーンがあるのは、看護福祉学部である。同学部の数値は、そのほとんどが 3.2 から 3.5 の間に分布しており、そのゾーンは他の学部に比して 0.2 ポイント前後高い位置にある。全学的に数値が低い「内容理解」に関しても同学部は、ここ 3 年間、3.2 を超える数値を示し続けており、その点で際立っている。看護福祉学部の授業評価の高さは注目すべきことであろう。

(4) 前後期の比較

前期と後期の比較も興味深い。2011 年度以降のデータを比較すると、経済学部や生物資源学部においては、毎年ほぼ全ての項目で、後期の数値が前期の数値より高く、0.1 ポイント前後の上昇が見られる。看護福祉学部や一般教育においても上下差は小さいもののおおむね後期の方が高めである。これらに対して、海洋生物資源学部においては前後期の逆転現象が見られる。この特殊性は 2010 年度の本欄で示唆されているが、その翌年には全項目において後期の数値が前期より低いという現象が見られ、翌 2012 年度もほぼ同様なパターンが見られた。同学部は、後期の数値そのものが低いことを深刻に受けとめ、カリキュラム変更なども含めた対策を講じ、2013 年度以降、後期の数値を上げることに成功した。その後、各数値は全体的に上昇傾向にあり、授業改善の成果が出たものと思われる。ただ前期の数値の方が後期より高いという他部局に見られないパターンそのものは、続く 2014 年度、2015 年度に再び全項目において現れており、この違いが何に由来するのかは気になるところである。

3.2 授業公開について

授業公開は 2004 年度後期から全学的に開始され、2007 年度からは各学部でそれぞれ独自の方針で取り組みが行われているが、2011 年度以降の本欄においては、参観者の減少や固定

化、そしてマンネリ化がくりかえし問題視されている。例えば随時公開制をとっている生物資源学部、看護福祉学部においては 2012 年度以降の 4 年間は参観者ゼロとなっている。しかしこのことは、授業改善の意欲が減退したということを直ちに意味すると考えるべきではなさそうである。昨年度の本欄においては、授業公開が積極的に行われていない部局において、それに代わる独自の授業改善の取り組みが活発であることが指摘されている。そしてその成果は、少なくとも授業評価において表れているように見える。例えば、前項でも言及したことであるが、授業公開への参観者ゼロが続いている看護福祉学部においては、授業評価の数値が毎年ほぼ全ての項目において全学一の高さを示しており、しかもグラフは右肩上がりである。このことは、同学部の報告にもあるように、看護福祉学部においては日頃から様々な形で教員同士が授業について検討を行う機会を多く設けており、授業公開以上に有効な授業改善の方策が実践されているということであろう。このことは、授業改善のあるべき姿が如何なるものかについてわれわれに再考させるものである。

3.3 研修等について

全学的な研修としては、例年行われている F レックスの FD 研修会が今年度は仁愛女子短期大学で開催され、本学からは 9 名の教員が参加した。ちなみに本学が主催校であった前年度の参加者は 16 名であった。全学企画というべき F レックスの研修会への参加者は多いとは言えないが、これとは別に学部独自の研修や懇談会も催されており、それぞれに努力が積み重ねられている。(部局別の報告参照)

各部局における研修企画の参加者は部局によって多寡があるが、看護福祉学部の参加者は他部局に比べて際立って多く、部局全体の授業改善への意識が高いことがうかがえる。このことが同学部の授業評価における高い数値に反映していると考えるのは自然であろう。

おわりに

本学の FD 活動は、2002 年度のワーキンググループ発足から始まり、2003 年度に事業開始、2004 年度からは授業評価が実施され、2005 年度以降全学的な FD 事業が軌道に乗ったとされている(2008 年度報告書)。全学的な FD 活動が始まって十数年を経て、かつて耳慣れなかった FD という言葉は大学において人口に膾炙するものとなった。その一方で、FD 活動のマンネリ化等も指摘されるようになった(2012, 2013 年度報告書)。実際、本年度の FD チームも、チームとして新たな活動をしたわけではなく、各部局の自主性に頼りながら前年通りの業務を行っただけにすぎない。しかし各部局や個々の教員においては、それぞれの状況に応じた独自の FD 活動が着実に行われており、その成果は本年度の授業評価の良好な結果にも現れている。FD 活動への取り組みやその評価については、教員間において差異の見られるところであろうが、10 年単位で見ると、FD 活動と授業改善の意識は大学に広く定着して、本学の教育にプラスの影響を与えている。これらは昨年までの本学 FD 活動のたまものであり、FD 活動を先導してこられた方々にはその労を多としたい。

なお本誌の編集については教育推進課の福岡さんに多大なる尽力をいただいております。記して感謝の意を表します。

ファカルティ・ディベロップメント報告書 2015

発行年月 2016 年 3 月

編集・発行 福井県立大学教育学習支援チーム